

Vol. **182** 2022.秋



《第25回》

特集
I

作文コンクール表彰式

特集
II

中国支部設立

特集
III

【会員会社ニュース がんばる企業】

大阪ガスマーケティング株式会社

移りゆく風景に
日々の愛——さが募ります。



一般社団法人

日本木造住宅産業協会

CONTENTS

木 芽 vol.182

秋号
令和4年(2022年)
12月5日発行

折々のひとひら 1

特集Ⅰ 第25回 木のある暮らし 作文コンクール表彰式をオンラインで開催 . . . 2

特集Ⅱ 中国支部設立総会を開催 13

特集Ⅲ 会員会社ニュース がんばる企業 / 大阪ガスマーケティング株式会社 15

木住協NOW 「令和3年度自主統計および着工統計の分析報告書」まとまる 17

連載 福島県と「応急仮設住宅の建設に関する協定」を締結 19

木住協NOW 木造ハウジングコーディネーター奮闘記 / (株)アイ工務店 岡本紘一朗さん 21

日本木造住宅産業協会 住まいのトレンドセミナー 2022年10月4日

【第1部】「木造住宅外皮の防水設計・施工指針および防水設計・施工要領(案)」概要説明 23

【第2部】「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究紹介」 25

連載 日本の世界遺産探訪 / 静岡県伊豆の国市 荏山反射炉 27

支部だより 資材・技術委員会主催 研修見学会(近畿支部) 29

木住協NOW 2時間耐火構造大臣認定第一号物件 大子町新庁舎視察会 32

新規会員紹介 33

連載 木の匠 Historia / 韻松亭(東京都台東区) 34

『葉』・・・「世」代をつなぐ葉の姿

木の一本、葉のいちようであつたとしても、その気配を感じられると、人は安らげる。地下壕での生活を余儀なくされている人々が、この瞬間にも居るのだと思うと、一層の念が込み上げてくる。

木々から、じつとじつくりと伝わってくる生命力。古へより、私たちは、森羅万象・花鳥風月に、人の一生を重ね詠ってきた。洋の東西どの時代でも然り、それらは、様々な言語独自の文化背景を以って詠い紡ぐだけの対象であり続けている。老木の葉に身を重ね、幼木の葉に夢想う。吟じられたそれらを味わうのは、まだ見ぬ未来に生きる、少年少女たちかもしれないことが、それらの存在を、更に生かし続けてくれ、文学と自然の交差のさまとして手にとることができる。

漢字『葉』は、漢字『世』の意味を真ん中に大きく含み、成り立った。『世』の成り立ちを紐解くと、木の枝が分かれ伸び、そこに新芽が芽吹いている象形である。つまり、世代を表現する時に、木々から方々へ出で伸びる姿をその象徴として重ねたのだ。その概念を、草冠と、漢字『木』で挟んだものが、『葉』と成った。

葉は、葉脈で水を吸い上げる。擬人化するに値する故、人の血流を運ぶ「脈」を用いられるのである。目下、人類による環境破壊により、命を減らすことはあつてはならない。人と自然、人と人との共生が、あらゆる意味で大きく揺さぶられる思いをしている昨今の国際社会。文明は新たな一手を考え、乗り切ったかのように錯覚をしがちであるが、喉元過ぎれば熱さを忘れることのなきよう、私たちは、民族国家間を越えて、未来に芽吹く新緑へと誓わなければ、この時代を越せなかった生命へ申し訳がない。

明日に伸びる一葉が、空へと向かい枝分かれし、世代を紡ぐことができるよう、個々人の水のやり方にも心掛けたい。

書家・文字文化文筆家 宇佐美 志都



折々のひとひら

第25回

木のある暮らし

だつたんそしやかい
脱炭素社会
SDGsの実現を
考えるきっかけに!

作文コンクール

表彰式をオンラインで開催



令和4年10月29日(土)に小学校の児童を対象に実施した、第25回「木のある暮らし」作文コンクールの表彰式をオンライン形式で開催しました。

今年も、国内938校に加え、特別支援学校3校、海外からは中華人民共和国、エジプト・アラブ共和国、ドイツ連邦共和国、インドネシア共和国、マレーシアの5カ国5校から、合計5,765点の応募が寄せられました。

この中から厳正な審査を経て国土交通大臣賞、農林水産大臣賞、文部科学大臣賞、環境大臣賞、外務大臣賞の大臣表彰をはじめ、住宅金融支援機構理事長賞、日本木造住宅産業協会会長賞、朝日小学生新聞賞、審査員特別賞など入賞18作品、木住協ブロック賞18作品、佳作29作品、特別賞4作品が決定しました。また、最優秀団体賞1校と優秀団体賞4校も選出しました。

昨年に引き続いてオンライン開催となった表彰式では、来賓として国土交通省住宅局住宅生産課 山下英和課長、審査員長はせがわゆうじ先生、木住協として市川晃会長、越海興一専務理事がライブ会場に出席し、受賞者23名の皆さんにはリモート参加していただきました。



6月より小学生対象の 「木のある暮らし」 作文募集を開始

「木のある暮らし」作文コンクールは、木造住宅や木材の計画的な利用が地球環境に与える好影響を訴えるとともに、日本の住文化の原点ともいえる木造住宅の素晴らしさを知っていただくため、平成10年から国土交通省が主唱する10月の住生活月間の関連行事の一環として木住協が主催しています(主催=住宅金融支援機構、後援=国土交通省、農林水産省、文部科学省、環境省、外務省、朝日学生新聞社)。

今回の作文コンクールは、令和4年6月1日から木住協のホームページに開催内容を掲載したことを皮切りに、全国の小学校や海外の日本人学校などに告知ポスター、お知らせを送付し、その後、朝日小学生新聞ほか開催告知広告を全国で行い、作品募集を開始しました。さらに、木住協では全国9支部や会員企業の事務所、モデルハウスなどに告知ポスターを貼り出すなど積極的な告知活動を展開し、去る9月6日に応募を締め切らせていただきました。



日本国内938校、 海外5カ国5校が応募 6氏の審査員が 厳正な審査を実施

今年も、高学年の部(小学4年生から6年生)で3,617作品、低学年の部(小学1年生から3年生)で2,148作品、合計で5,765点の応募が寄せられました。応募学校は国内938校のほかに、特別支援学校3校(4作品)、海外からは中華人民共和国、エジプト・アラブ共和国、ドイツ連邦共和国、インドネシア共和国、マレーシアの5カ国5校からも応募(9作品)をいただきました。

審査は低学年と高学年の部に分けた厳正な予備審査を経て、9月28日に審査員による最終審査を行いました。審査員はイラストレーターのはせがわゆうじ氏を審査員長に、南雲ゆりか氏・南雲国語教室主宰、石井秀明氏・国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室長、嘉藤鋭氏・住宅金融支援機構マンション・まちづくり支援部技術統括室長、今澤勇氏・朝日学生新聞社取締役営業担当兼大阪支社

長、越海興一・木住協専務理事の6氏で構成。①「木のある暮らし」というテーマに沿っていること、②具体的で分かりやすいこと、③発想が自由で豊かであること、④表現力がユニークであること、⑤本人の考え方が良



バーチャルスタジオとMC

く伝わること — などを基準に、厳正に選考しました。



5つの大臣賞など表彰

国土交通大臣賞は、高学年の部で6年生の杉野愛梨さん(千葉県)の「時が創り出すもの」が、低学年の部で3年生の大和田悠真さん(茨城県)の「家づくりは木のリレー」が、それぞれ受賞しました。

文部科学大臣賞は、高学年の部で5年生の小田原志竜さん(鹿児島県)の「木の七変化」が、低学年の部で2年生の中村瑠里さん(千葉県)の「アイスのぼうってどんな木」が受賞しました。

農林水産大臣賞は、高学年の部で5年生の田中琴菜さん(福井県)の「あーちゃんの桜の木」が、低学年の部で2年生の昆光葵さん(宮城県)の「木ってすごいな」が受賞しました。

環境大臣賞は、高学年の部で6年生の佐藤迪洋さん(静岡県)の「ぼくのチャージ」が、低学年の部で3年生の馬場望さん(千葉県)の「木の良いところ」が受賞しました。



木住協 市川晃会長



受賞者インタビューの様子

外務大臣賞は、高学年の部で4年生の吉田桜子さん(マレーシア)の「みんながぐらしやすい社会へ」が、低学年の部で2年生の吉田直太朗さん(マレーシア)の「みんなやさしく」が受賞しました。

住宅金融支援機構理事長賞は、高学年の部で5年生の斎藤瑠乃さん(兵庫県)の「神様の木に出会って」が、低学年の部で1年生の袴田あいさん(静岡県)の「しゃべる木のおうち」が受賞しました。

日本木造住宅産業協会会長賞は、高学年の部で6年生の泉奏花さん(千葉県)の「祖父の眠る棺」が、低学年の部で2年生の武田英里さん(愛媛県)の「やさしいじいちゃん」が受賞しました。

朝日小学生新聞賞は、高学年の部で6年生の田中伊織さん(京都府)の「僕の周りは素敵な木に溢れている。」が、低学年の部で2年生の山下晃生さん(滋賀県)の「さびしそうな木」が受賞しました。

審査員特別賞は、高学年の部で4年生の筱茉莉紗さん(エジプト)の「木のすばらしさと生きるたくましさ」、3年生の角岡ころもさん「木と森と」が受賞しました。



オンライン表彰式をライブ配信 受賞者はリモートで参加

オンライン表彰式には、令和4年10月29日(土)午後2

時より、受賞者26名の皆さんにリモート参加していただきました。また、ライブ会場には、来賓、審査員長、協会役員、さらに表彰式をつくり上げてきたスタッフが集まりました。

初めに、司会者より新型コロナ



国土交通省 山下課長



はせがわゆうじ 審査員長



越海専務理事



※画像は杉野様からご提供いただいています



ザッ、ザッ。
いつでも使えるように
研がれているのみのみ
木の上をすべる。



時間が染み込んだような
深みのある茶色が、
空色との差をより際立たせている。

五重に重なる軒の
部分がせり出し、

※画像は杉野様からご提供いただいています

国土交通大臣賞高学年の部 杉野 愛梨さん 「時が創り出すもの」朗読動画

ナウイルス感染症拡大の影響で表彰式の開催が危ぶまれましたが、このような形で無事実施できたことについて関係者の皆様への感謝の言葉を述べました。

その後、主催者を代表して市川晃会長が、

『この度は受賞誠にありがとうございます。この「木のある暮らし」作文コンクールはおかげさまで、今年25回目を迎えることができました。ご尽力いただいた方々へ深く感謝申し上げます。また、受賞者の皆さん、ご家族やご支援をいただいた皆様、本日の表彰式にご参加いただき、誠にありがとうございます。今年も、全国各地の小学校や特別支援学校、海外5カ国の日本人学校、そして会員企業等を通じて、たくさんの作品を応募いただきました。私も読ませていただきましたが、どの作品も素晴らしく、皆さんの思いが伝わりました。審査員の先生方も大変ご苦労されたのではないかと思います。皆さんの一生懸命に原稿に向かっていた姿が想像でき、心温まる時間を過ごすことがで

きました。改めて応募いただいた皆さんに、心から感謝と敬意をささげたいと思います。さて、皆さんはSDGsという言葉を知っていますか？ SDGsとは、私たちの暮らしや地球を守りながら、いろいろな問題を解決して、豊かで幸せな未来をつくるための世界中が取り組むべき目標のことです。少し難しいかもしれませんが、森林には自然のままの守っていくべき「天然林」と、人の手で植えられた活用すべき「人工林」があります。人がつくった森林は、適切に管理して手入れをすることで再生可能な資源になります。また、木は、成長するときにたくさんの二酸化炭素を吸収するので『地球温暖化』も防いでくれます。つまり、森の仕組みをしっかりと理解し、木を伐り、使い、植える、育てるということを繰り返行なえば、SDGsの実現につながります。そしてなによりも木は人に優しい素材です。今年もこの作文コンク

ールを通して『木の大切さ、すばらしさ』を気づかれたのではないのでしょうか。これからも、この作文コンクールのテーマである『木のある暮らし』を通して、木や森、そして環境のことについて考え、興味を持ち続けていただきたいと思います。最後になりますが、応募してくださったたくさんの小学生の皆さん、そしていつもこの作文コンクールを支えていただいている保護者、学校関係者、ご後援いただいているすべての関係者の皆様に心から感謝申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。』と開会挨拶を述べました。

続いて来賓を代表して国土交通省住宅局住宅生産課山下英和課長が、「第25回『木のある暮らし』作文コンクールにおいて、大臣賞などの賞を取られた皆様方、本当におめでとうございます。今年も、多くの小学生の皆さんが、身の回りにある木のことについて色々と考えて、それを作文にし、この作文コンクールに参加してくれたことを大変嬉しく



思います。今回、賞を取られた皆さんの作文を読ませてもらいました。そこには、色々な木のことが書かれていました。古い大きな木、身の回りにある木、木で作られた色々なもの、そして、木で建てられた家や建物の話など、どの作品も、読んでみると、木のあるくらしの風景が、目に浮かんでくるような気がしました。

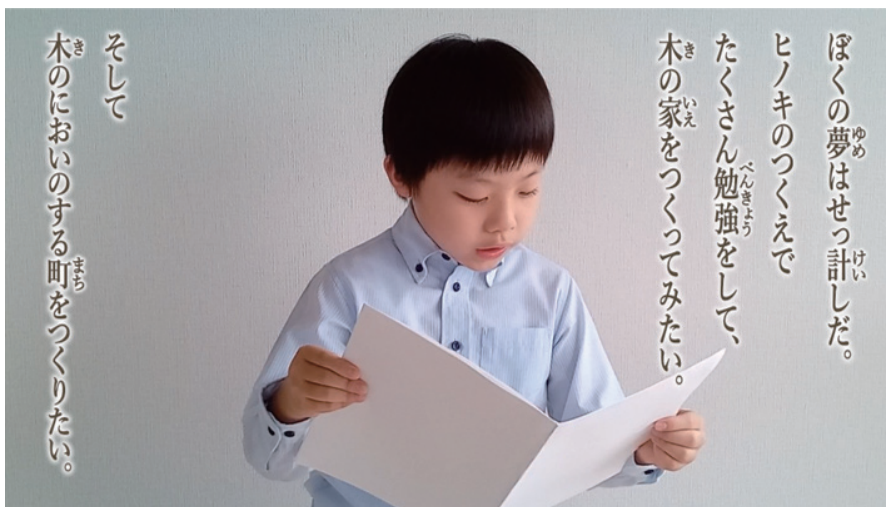
作文を読ませてもらって、確かにこんな木もあるのかな、こんなところにも木は使われているのかな、気付かされたことも多くありました。また、木の香りやにおいのことを書いたもの、そこに木があることで、周りが涼しくなることを書いたものなど、目で見ただけではなくて、体で感じたことを書いてくれた作品もありました。そして、何よりも、そこに立っている木や木でできた家や建物を通じてそこで暮らしている自分の家族や家をつくってくれた人とのつながりや、思いに気付いてくれた、考えてくれたということは、『木のあるくらし』という作文を書いてもらって、本当に良かったと思います。今回受賞された作文は、どれも本当によく考え

られた、大変素晴らしい作文ばかりで、これを書き上げることは、本当に大変だったと思います。皆さん方が大きくなっても、小学生のときに『木のあるくらし』という作文コンクールで、木のことを作文に書いて賞をもらったことを、時には思い出してもらって、その時は、身の回りにある木のことも考えてもらえたら、嬉しく思います。本日は、本当におめでとうございます。」と祝辞を述べました。



受賞者の皆さんから 事前に送られた喜びの声を 動画で配信

この後、受賞者の表彰に移りました。昨年に引き続きオンライン開催ということで、受賞者から事前に送られた喜びの声を編集して配信することとなりました。受賞者の皆さんのうれしそうな笑顔や照れた顔、ちょっとした表情など、印象深い動画が多数寄せられました。



国土交通大臣賞は、国土交通省住宅局住宅生産課 山下英和課長より、杉野愛梨さんと大和田悠真さんにオンラインにて表彰状が授与され、杉野愛梨さんからは「多くのことわざや慣用句には、木を人間に例えているものがたくさんあります。私たちにとって木は遥か昔から身近で特別な存在であるということを、作文を通して改めて実感しました。今回、作文に登場する大工さんに受賞の報告をすると、とても喜んでいただきました。素敵な賞を下さりありがとうございました。」大和田悠真さんからは「このような素晴らしい賞を頂き、とても嬉しいです。木の家がするのが楽しみです。」とのコメントをいただきました。

引き続き、各受賞者の皆さんのコメント動画が配信されました。

農林水産大臣賞では、小田原志竜さんより「このような賞を受賞



※ 画像は大和田様からご提供いただいています

国土交通大臣賞低学年の部 大和田 悠真さん 「家づくりは木のりれー」 朗読動画



リモート参加した受賞者の皆さん全員集合 スクリーンショット記念撮影

でき、とても嬉しいです。ありがとうございます。」、中村瑠里さんより「この度は、このような素晴らしい賞を頂き、とても嬉しく思っております。大好きなアイスが、木について学ぶきっかけとなりました。本当にありがとうございました。」とのコメントをいただきました。



受賞された 皆さんの喜びの声

文部科学大臣賞では、田中琴菜さんより「ありがとうございます。とても嬉しいです。これからもあーちゃんの木を家族と一緒に守っていききたいです。」、昆光葵さんより「文部科学大臣賞が取れて嬉しいです。頑張った甲斐がありました。」とのコメントをいただきました。

環境大臣賞では、佐藤迪洋さんより「チャージの木を守ることが、琉球の文化や心、環境を守ることに繋がります。これからもチャージを大切に育てていききたいです。」、馬場望さんより「このような素晴らしい賞を下さしましてありがとうございます。作文で書いたように、これからも木の良いところを、もっと見つけていききたいです。」とのコメントをいただきました。

外務大臣賞では、吉田桜子さんより「このような素敵な賞をありがとうございます。これからも私たちができることを、少しずつ頑張っていきたいです。」、吉田直太朗さん

からは「素敵な賞をありがとうございます。これからも木に優しくできるように頑張りたいと思います。」とのコメントをいただきました。

住宅金融支援機構理事長賞では、斎藤瑠乃さんより「ありがとうございます。受賞とても嬉しいです。これからも色々なご神木に会いに行くことを楽しみにしています。」、袴田あいさんからは「この度は素晴らしい賞を頂きありがとうございました。これからも木のお家を大切にします。」とのコメントをいただきました。

日本木造住宅産業協会会長賞では、泉奏花さんより「今年の4月、大好きだった祖父がこの世を去りました。その祖父と過ごした最期の時を想い、心を込めて書いた作文で賞を頂くことができ、とても嬉しいです。祖父との大切な思い出、そして学んだことを、いつまでも忘れずに前に進んでいきたいです。この度はありがとうございました。」、武田英里さんからは「素晴らしい賞を頂くことができ、とても嬉しいです。じいちゃん家は優しくて、温かくて、私の大好きなお家です。じいちゃんと同じ歳で古いお家だけど、これからも大切にしたいです。ありがとうございます。」とのコメントをいただきました。

朝日小学生新聞賞では、田中伊織さんより「皆さんもお家に木を植えてみてください。きっと夏が涼しくなります。」、山下晃生さんからは「大雨でめちゃくちゃになった川や木も、今はきれいになりつつあります。この作文を皆さんに読ん



でもらえて、とても嬉しかったです。ありがとうございました。」とのコメントをいただきました。

審査員特別賞では、筱茉莉紗さんより「ありがとうございました。このような素晴らしい賞を頂き、本当に嬉しいです。これから学校の皆や先生と一緒に、カエンジュの木と遊んで、カエンジュの木を守っていきたいです。」、角岡ころさんからは「こんなに素晴らしい賞を頂いて、とても嬉しいです。ありがとうございました。」とのコメントをいただきました。



木住協全国9ブロック賞表彰 最優秀団体賞も決定

引き続き、日本木造住宅産業協会ブロック賞の授与に移りました、表彰は、全国9ブロックに分かれて、審査を担当した支部長名で行われました。

北海道ブロック賞は、高学年の部で6年の前田健志さん(北海道)の「ばくの自慢の木の家」が、低学年の部で3年の野原琉太さん(北海道)の「バルコニーの木」が受賞しました。

東北ブロック賞は、高学年の部で6年の戸村杏莉さん(山形県)の「我が家のシンボルツリー」が、低学年の部で1年の水野谷良太さん(福島県)の「森の木のプレゼント」が受賞しました。

関東ブロックは、高学年の部で4年の清水冬和子さん(千葉県)の「木の香りいっぱい学校」が、低学年の部で3年の福井遥さん(埼玉県)の「木をめぐる二つの気持ち」が受賞しました。

北信越ブロック賞は、高学年の部で6年の名取優寿希

さん(長野県)の「木と共に生きていく」が、低学年の部で2年の高橋結さん(福井県)の「たいせつな木」が受賞しました。

甲・静岡ブロック賞は、高学年の部で6年の赤堀塔子さん(静岡県)の「自然の恵みの清沢和紙」が、低学年の部で3年の高橋陽馬さん(静岡県)の「会えなくてもつながっている」が受賞しました。

中部ブロック賞は、高学年の部で4年の内藤綾乃さん(愛知県)の「間伐体験で学んだこと」が、低学年の部で1年の松浦衣那さん(岐阜県)の「大すきな木のいえ」が受賞しました。

近畿ブロック賞は、高学年の部で6年の宮崎純大さん(兵庫県)の「家族をつなぐ木」が、低学年の部で1年の寺内湊都さん(滋賀県)の「クロガネモチのき」が受賞しました。

四国ブロック賞は、高学年の部で4年の城福悠々香さん(徳島県)の「私の好きな場所」が、低学年の部で3年の柚山琴美さん(愛媛県)の「木で作られたおまごとセット」が受賞しました。

中国・九州・沖縄ブロック賞は、高学年の部で6年の釘宮里帆さん(大分県)の「三千年の時を超えて」が、低学年の部で2年の盤若よつばさん(鹿児島県)の「木にかこまれたわたし」が受賞しました。

受賞した皆さんから動画コメントが寄せられ、リモート参加もされました。また、佳作として、高学年の部15作品、低学年の部14作品、計29作品が選出されました。さらに、特別賞として、特別支援学校の高学年の部3作品が選出されました。



受賞者と作品名

大臣賞等・ブロック賞

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
低学年の部 (小学1年生から3年生)	国土交通大臣賞	家づくりは木のリレー	大和田 悠真さん	茨城県
	文部科学大臣賞	木ってすごいな	昆 光葵さん	宮城県
	農林水産大臣賞	アイスのぼうってどんな木	中村 瑠里さん	千葉県
	環境大臣賞	木の良いところ	馬場 望さん	千葉県
	外務大臣賞	みんなやさしく	吉田 直太朗さん	マレーシア
	住宅金融支援機構 理事長賞	しゃべる木のおうち	袴田 あいさん	静岡県
	日本木造住宅産業協会 会長賞	やさしいいちゃんち	武田 英里さん	愛媛県
	朝日小学生新聞賞	さびしそうな木	山下 晃生さん	滋賀県
	審査員特別賞	木と森と	角岡 ころろさん	宮城県
	北海道ブロック エゾマツ賞	バルコニーの木	野原 琉太さん	北海道
	東北ブロック ケヤキ賞	森の木のプレゼント	水野谷 良太さん	福島県
	関東ブロック ケヤキ賞	木をめぐる二つの気持ち	福井 遥さん	埼玉県
	北信越ブロック マツ賞	たいせつな木	高橋 結さん	福井県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	会えなくてもつながっている	高橋 陽馬さん	静岡県
	中部ブロック イチイ賞	大きな木のいえ	松浦 衣那さん	岐阜県
	近畿ブロック もみじ賞	「クロガネモチのき」	寺内 湊都さん	滋賀県
	四国ブロック マツ賞	木で作られたおままごととセット	柚山 琴美さん	愛媛県
	中国・九州・沖縄ブロック カイコウズ・クスノキ賞	木にかこまれたわたし	盤若 よつばさん	鹿児島県

	賞 名	題 名	名 前	都道府県
高学年の部 (小学4年生から6年生)	国土交通大臣賞	時が創り出すもの	杉野 愛梨さん	千葉県
	文部科学大臣賞	あーちゃんの桜の木	田中 琴菜さん	福井県
	農林水産大臣賞	木の七変化	小田原 志竜さん	鹿児島県
	環境大臣賞	ぼくのチャーギ	佐藤 迪洋さん	静岡県
	外務大臣賞	みんながくらしやすい社会へ	吉田 桜子さん	マレーシア
	住宅金融支援機構 理事長賞	神様の木に出会って	斎藤 瑠乃さん	兵庫県
	日本木造住宅産業協会 会長賞	祖父の眠る棺	泉 奏花さん	千葉県
	朝日小学生新聞賞	僕の周りは素敵な木に溢れている。	田中 伊織さん	京都府
	審査員特別賞	木のすばらしさと生きるたくましさ	筱 茉莉紗さん	エジプト
	北海道ブロック エゾマツ賞	ぼくの自慢の木の家	前田 健志さん	北海道
	東北ブロック サクラソバ賞	我が家のシンボルツリー	戸村 杏莉さん	山形県
	関東ブロック マキ賞	木の香りいっぱい学校	清水 冬和子さん	千葉県
	北信越ブロック シラカバ賞	木と共に生きていく	名取 優寿希さん	長野県
	甲・静岡ブロック モクセイ賞	「自然の恵みの清沢和紙」	赤堀 塔子さん	静岡県
	中部ブロック ハナノキ賞	間伐体験で学んだこと	内藤 綾乃さん	愛知県
	近畿ブロック クスノキ賞	家族をつなぐ木	宮崎 純大さん	兵庫県
	四国ブロック やまもも賞	「私の好きな場所」	城福 悠々香さん	徳島県
	中国・九州・沖縄ブロック ブンゴウメ賞	三千年の時を超えて	釘宮 里帆さん	大分県

佳作

低学年の部	高学年の部
古川 琴葉さん 福島県	佐々木 璃都さん 宮城県
兼岡 史典さん 千葉県	小牧 愛子さん 神奈川県
段野 陽葵さん 千葉県	筒井 美唯子さん 千葉県
松平 瑞也さん 福井県	青山 結葵さん 千葉県
神谷 友梨子さん 静岡県	行木 まりさん 千葉県
高田 菜里花さん 大阪府	横道 弘樹さん 静岡県
中本 凜さん 奈良県	田中 琉鳳さん 岐阜県
松本 結さん 兵庫県	谷澤 あかりさん 滋賀県
緒方 莉月さん 熊本県	中村 冨輝子さん 和歌山県
福岡 心ノ花さん 鹿児島県	武田 直起さん 愛媛県
北野 結華さん 鹿児島県	中川 結奏さん 徳島県
中村 沙友梨さん 鹿児島県	馬場崎 心さん 佐賀県
平 結愛さん 鹿児島県	片山 紗江さん 鹿児島県
上田 実織さん 中国	新倉 将希さん 神奈川県
	丸山 結愛さん ドイツ

特別賞

高学年の部
新倉 将希さん 神奈川県
西川 洋夢さん 鳥取県
江隈 粋心さん 福岡県
藤原 蓮さん 鳥取県

団体の部

最優秀団体賞	沖縄市立美東小学校
	国府台女子学院小学部
優秀団体賞	高崎市立東部小学校
	富田林市立喜志小学校
	矢吹町立矢吹小学校



審査員の講評

イラストレーター
はせがわゆうじ氏

今回もまたまたハイレベルな作品が集まりました。

最終選考に残った作品は、どれも賞を取ってもおかしくない、精鋭揃いでした。

その中でもひととき感じさせるものがあった「時が創り出すもの」。

時間が染み込んだような深みのある茶色…とか、個性を殺さず癖を生かす…など、ため息が出てしまうような表現力です。

同様に「祖父の眠る棺」の文学的かつ詩的な表現力も、抜きん出ていました。

あーちゃんへのストレートな想いをつづる「あーちゃんの桜の木」。

不覚にも泣いてしまいました… あーちゃんもきっと空から見ていてくれると思います。

「木の七変化」は読んでいてニンマリしてしまう、小学生ならではのセンスあふれる文体。とことん木が活躍します。

たくさんの人が一本の木をリレーして、僕に回って来た「家づくりは木のリレー」。僕はしっかりとリレーを受け止めています。

バイオリンの奥深さがとても伝わって来る「木ってすごいな」。

アイスの棒に感じた疑問から、大きな環境問題につながる「アイスのほうってどんな木」。

その他、どの作品にも何かしら、感銘を受けるものがありました。

毎年みなさんの作文には、大人のはずの私が元気をもらっています。

そして「みんなやさしく」の最後の言葉、「友だちにするのと同じように、(木から)やさしくしてもらったら、(木に)やさしくしてあげたいとほくは思います。」この大切な言葉、私はみなさんに対して、本当にそんな気持ちでいっぱいです。

また素敵な作品と笑顔に出会えることを、楽しみにしています。

南雲国語教室主宰
南雲 ゆりか氏

小学生の今しか書けない、大切な思いの結晶である作文。拝読できる幸せをかみしめながら審査に当たらせていただきました。

「やさしいじいちゃんち」は、日常のひとときを丁寧に描くことで木の家の存在感を見事に表現しました。じいちゃんの腕をまくらに寝転ぶと、「じいちゃんのかた目をちょっただけあけて、わたしを見て、また目をとじた」と書き出します。一緒に語らいながら「家のやさしさ」に気づいた作者は、じいちゃんをせमितりに誘います。ここで書き終えていることで、せみしぐれに包まれた夏の午後のイメージが心に残ります。じいちゃんと幸せなひとときを過ごす舞台として、どっしりした木の家はぴったりですね。

「僕の周りは素敵な木に溢れている」からは、作者の豊かな語彙力、表現力がうかがわれました。「さながらうっそうとした小さな森のようなのだ」「ムベの実がたわわに実る。ほおばると〜」「スイカにかぶりつく」などの「やまと言葉」を自分の言葉として見事に使いこなしています。考えや意見をうまく言葉にのせた作品でした。

「木の七変化」は、内容のおもしろさに加えて、生き生きとした表現、構成のうまさ三拍子そろった作品です。薪での風呂沸かしが「兄弟げんかになるほど」人気があるという表現で、弾んだ雰囲気伝わります。おじいちゃんが「なんまいだあ」と念仏を唱えるときは、お風呂の熱さをがまんしている時なのでたくのをやめる、というくだりで笑ってしまいました。傷つけないように熱さを伝えているのですね。作文の終わりに木の七変化を改めてまとめているのも、考えを伝える上手な書き方です。

他にも、首里城への熱い思い、身近な木製品から考えたこと、木を大切にすることなど、秀作が並びました。まだまだ感想をお伝えしたいのに残念です。みなさんの作品を通して私も木を想い、豊かな時間を過ごすことができました。ありがとうございました。





国土交通省 住宅局
住宅生産課 木造住宅振興室長
石井 秀明氏

力作ぞろいのなか、国土交通大臣賞には、木造の建築を題材とした作品を選定しました。

低学年の部は、「家づくりは木のリレー」です。

まずは描写力に驚かされました。作者が体験した数々の場面の情景が、ありありと目に浮かびます。そして、上棟式、伐採体験、製材所と、まさに「川上」から「川下」までの木の流れを「リレー」として漏らさず書き尽くしています。

次に表現力です。リレーされる木を「風呂のにおい」をメタファにしつつ、「はくの木」と親近感たっぷりに表現します。文末では、作者は設計士になりたいと宣言します。幼少の体験を将来の職業にすること、人々の思いを形に繋げる職能であることにも、「リレー」の視点が入っています。それを、ヒノキの机の存在が、バトンとして仲介しているのも秀逸です。

この驚くべき文才や感性は、是非、文壇ではなく、宣言どおり設計士として我々の分野で活かして欲しいものです。

次に、高学年の部は、「時が創り出すもの」です。

こちらは、とにかく、大人っぽくて技巧的な文章。

まず、タイトルで期待MAXです。また、文中の「時間が染み込んだような深みのある茶色」「時空旅行をしているような」といった表現に加え、文頭の「照りつける太陽」を文末で「暑さを忘れた気がした」と回収するなど。

さらには、五感をフル活動させた「深みのある茶色」、「木の削りかすの香り」、「木の優しい触り心地」、「大工さんの柔らかい声」といった表現。脱帽です。

テーマは、タイトルにある「時」が人々の思いを伝えていくことに加えて、木にも人間にも個性があるとするダイバーシティの視点も。テーマも大人顔負けの作品です。

いずれも、木や建築を通して何かが受け継がれていくというテーマの作品を選ぶことになりました。作品の素晴らしいさに感動するとともに、木には「時」を刻み込む力があるという、新たな気づきを与えていただいたことに感謝いたします。



独立行政法人 住宅金融支援機構
マンション・まちづくり支援部 技術統括室長
嘉藤 鋭氏

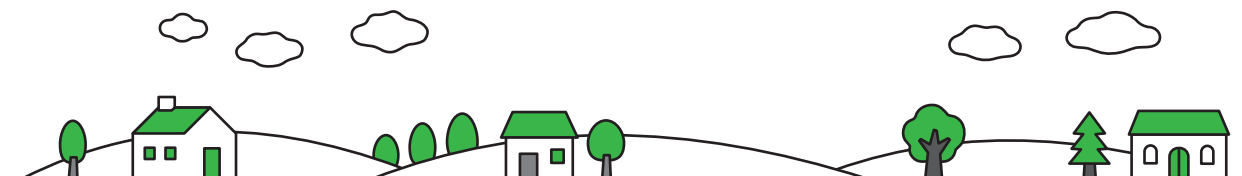
まわりにある木のことを作文にして、今年も全国から数多くの作品が届きました。応募いただいた皆さま、本当にありがとうございました。皆さまの作品を読んでいると、木のある暮らしの中で体験したこと、感じたことなどへの想いにどんどん引き込まれて

いき、その情景が鮮やかに頭に浮かび、木のある暮らしがとても暖かいものであることを改めて実感することができました。応募いただいた作品は、いずれも力作で素敵な作品ばかりでした。

低学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「しゃべる木のおうち」は、しゃべる木のおうちをいきいきと表現しています。おうちから、ばきんばきんと話しかけているような音が聞こえると、木が寂しがっていると思い、優しく会話する光景を見事に描いています。木のおうちは、雨や雷から守ってくれる家族としてこれからも大事にしていきたいと願いながら、寂しがらないようにおしゃべりを沢山しようと木のおうちを親しむ思いが伝わってくる素晴らしい作品です。

高学年の部の住宅金融支援機構理事長賞「神様の木に出会って」は、夫婦大楠の迫力を鮮明に表現しています。家族全員で出かけた時に夫婦大楠と出会い、とても大きく立派である木に深く感動し、空を見上げると光がさし込み、その光が当たった幹の表面の美しさをきめ細かく丁寧に描いています。樹齢900年の木であるため、歴史上の人物もこの木を見ているかもしれないと気持ちが高ぶり、この木に歴史上の出来事を見て知ることがあったら聞いてみたい気持ちになる素晴らしい作品です。

作文は、作文用紙を通じて作者の思いが読者に伝わります。作文用紙に書かれた文字一つ一つが作者の思いを届け、大きな感動を与えてくれます。素晴らしい作文を、これからもずっと書き続けてください。そして、素敵な感動をみんなに広く届けることを期待しています。





朝日学生新聞社 取締役営業担当
兼 大阪支社長
今澤 勇氏

とても優れた取材力・観察力・表現力。聞いたこと、調べたこと、感じたこと、さまざまな体験を通じてみなさん多くのことを学びながら、それらを作品の中にとってもいきいきと表現していました。どの作品も木のある暮らしの中の日常を、みずからの視点で丁寧に切り取った魅力ある作品ばかりでした。



低学年の部の朝日小学生新聞賞「さびしそうな木」は、大雨により近くの川が増水し、河原にも大きな被害が出た様子を見たときの気持ちを素直に表現しています。打ち上げられた大きな木を見て、「かなしい」「何かに使えないだろうか」と思いを巡らし「雨がわたしにも木にもやさしくなればいいと思いました」と自然環境への心配をやさしい表現でまとめてくれました。昨今報道されている台風や大雨による山の土砂崩れや洪水被害など、地球規模の気候問題にもつながっていくテーマ性のある作品でした。

高学年の部の朝日小学生新聞賞「僕の周りには素敵な木に溢れている」は、暑い夏、祖母の家で過ごした時の風景を鋭い観察眼と個性豊かな表現でまとめていました。「小さな森」と呼ぶ多くの木々に囲まれた祖母の家。なぜ、日暮れの家の中はクーラーのない場所でも涼しいのか……。昔の人の生活を想像させ、色々なことを気づかせてくれた木。「僕はぜひ家に木を植えることをお勧めする」との提言にはとても力強さを感じました。

今回の朝日学生新聞社賞の2作品は「大雨で流されて目的を失った悲しい木」と「夏の家の中を涼しくさせる庭のありがたい木」と様々な木の表情を感じ、それぞれ違う角度から「木と暮らす大切さ」に改めて気づかされる作品でした。

受賞されたみなさん、おめでとうございます。応募されたすべてのみなさんに感謝申し上げます。



一般社団法人日本木造住宅産業協会
専務理事
越海 興一氏

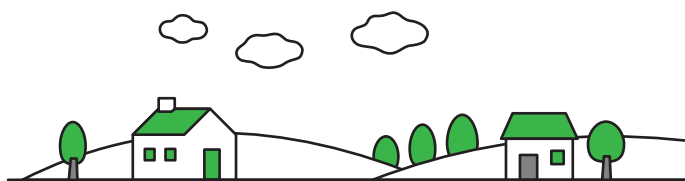
今回もたくさんの応募をいただき有り難うございました。どの作品も身の回りにある樹木や家、木製品について、また、それらに関わる人々、特に大切な家族について、よく調べ、観察し、取材して、原稿用紙に生き生きと表現し、堂々と意見を述べています。



小学生の皆さんが、この作文コンクールを通じてコミュニケーション能力を養い、いずれ立派な社会人となって国内外で活躍する姿を想いつつ楽しくも緊張感を持って審査に臨みました。

さて、その作文コンクールも今年で25回目を迎えました。すなわち、建設省の住宅月間に合わせて、木住協が全国的な認知を目指して「10月18日は木造住宅の日」と定め、同年、小学生を対象に作文コンクールを開始したのが25年前です。初期のテーマ「木の家・こんな家に住みたい」で応募いただいた当時の小学生も今はお父さんお母さんとなって、そのお子様もそろそろ小学生に上がって今回ご応募いただいているのだらうと想像しながら作品を読ませていただき、感慨もひとしおでした。この25年で時代は大きく変わり、単に「木造住宅は木の温もりがあつていいね。家づくりを通して、家族や大工さんとの絆が深まるよね。」との協会の想いを遥かに超えて、昨今「木は地球温暖化防止に役立つ循環型資源」にまでグレードアップされています。そのため、より視野を広げて、21回目からはテーマを「木のある暮らし」に変更し今日に至ります。この時代の潮流に見事に応え、ご応募いただいた作品は、木造住宅に限らず、家具から玩具までの木製品、植林から製材までの林業体験、そしてお庭の植木から街や学校の樹木に至るまで、幅広く題材とし、しかも良く調べて上手に表現されています。なるほど、小学校において環境やSDGsに関する教育が進展していることを実感しました。引き続き、様々な題材で我々審査員を驚かせるような作品の登場を今から楽しみにしております。

最後に、ご後援をいただきました国土交通省、農林水産省、文部科学省、環境省、外務省、住宅金融支援機構、朝日学生新聞社、ならびに教育委員会はじめ学校関係の方々、本コンクールにご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。



全国で10番目の
支部設立

中国支部設立総会を開催

支部長に中国木材株式会社 代表取締役会長 堀川 智子氏を選定

全国で10番目の支部組織として 中国支部を設立

令和4年9月5日、広島市において中国支部設立総会が開催された。同支部は中国地域（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）に本・支店を置く正会員会社、及び賛助会員で構成され、令和元年6月に設立された四国支部に続いて10番目の支部となる。設立総会では支部名称や幹事の選任、令和4年度事業計画などがそれぞれ満場一致で承認となり、支部長に堀川 智子・中国木材株式会社 代表取締役会長（当時社長）を選定した。

午後3時から広島市の「シェラトングランドホテル広島」で開催された設立総会には、正会員11社15名、賛助会員3社4名が参加した。西勝敏・住友林業（株）住宅・建築事業本部 広島支店次長が司会役を務め議事が進められた。審議に先立ち、市川晃・会長が挨拶に立ち、支部組織の役割や支部活動の重要性について、以下のように述べた。

「昨今、カーボンニュートラル、SDGsといった世界的な環境問題等への対処から、住宅・建築物を含めた全般的な省エネ強化や二酸化炭素の排出削減が重要課題となっています。その際、樹木は成長時に二酸化炭素を吸収し、伐採した木材が建築物その他の用途でそのまま炭素を貯蔵でき、伐採後に植林して山林を再生できる循環型資源であることから、近年、木材が注目を浴び、2017年フランス（ポルドー）から始まった中高層木造建築物の発展を目指す国際的イベント WOODRISE も昨年10月に日本で開催されています。その木材の一層の利用促進のため、法改正によって『炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進



開会の挨拶を行う市川会長



に関する法律（森林（もり）を活かす都市（まち）の木造化推進法）』、これも昨年10月に施行されました。木住協は、これまでも地球環境に優しくサステナブルな素材である「木」の良さを人々に訴え、持続可能で豊かな社会の実現を目指して、技術開発や技術支援、人材育成や調査研究、広報活動、行政への提言等、種々の活動を積極的に行って参りました。そして今、民間建築物に木材利用促進が求められ、併せて、山林の多い我が国の地域経済を考えれば、社会的要請に応え中大規模木造建築物の技術開発・普及、並びに全国規模で支部設立を進めてきた協会には、これまで以上に技術開発や地域貢献活動のニーズが広がっております。そのため、地方の会員に対する支援強化を含めた活性化と地域貢献を重要事項の柱の1つとし、この数年は官民の様々な団体活動に主に川下（木材利用産業）側の立場で参加し、また、支部も通じて地方自治体との災害時応急仮設住宅建設協定や木材利用促進協定など様々な地域の連携を支援しております。このような状況の中、林産県で製材産業の盛んな中国地域において、会員の皆様のご賛同を得て、本日ここに10支部目となる中国地域の支部設立総会が開催されることは、誠に喜ばしく、支部の設立に多大のご尽力ご協力をいただいた会員の皆様には、心から感謝の意を表します。今後の支部活動に対し、本部としても精一杯支援して参りますので、支部会員の皆様方におかれましても積極的なご支援、ご協力を心よりお願い

申し上げます。」

続いて議長の選任を行ない、支部長が選任されていないことから越海興一・本部専務理事を議長に選任し、審議が進められた。設立総会では第1号議案「支部名称に関する件」、第2号議案「支部組織に関する件」、第3号議案「支部役員（幹事）の選任に関する件」、第4号議案「令和4年度事業計画（案）に関する件」、第5号議案「令和4年度収支予算（案）に関する件」の5議案が審議された。

第1号議案について、佐々木陽一・参与兼事務局長が「本支部の名称は、中国地域（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）に本・支店等を置く正会員会社及び賛助会員で構成することから、中国支部と称する」と説明し、満場一致で承認した。

第2号議案も佐々木参与から説明し、満場一致で承認した。中国支部の組織は、支部総会の下に幹事会と事務局を置き、幹事会の下に運営委員会と必要に応じて各委員会を設置する。また、支部長の下に副支部長と支部幹事、事務局長をおくことを決めた。

第3号議案では設立準備事務局から幹事候補者が提出され、別添の通り6人を支部幹事に選任することを承認した。続いて第4号議案と第5号議案は一括で承認された。

地元県市と密接な連携を

設立総会において選任された6人による幹事会が開催され、支部長、副支部長の選定が行われ、中国支部の体制が決定した。堀川智子幹事（中国木材㈱代表取締役会長（当時社長））を支部長に、野津基弘幹事（ライフデザイン・カバヤ㈱代表取締役）を副支部長にそれぞれ選定した。支部事務局は住友林業広島支店内に設置され、事務局長には、広島支店の西勝敏次長が就任した。

堀川支部長は支部長就任、

支部活動への抱負を以下のように述べた。

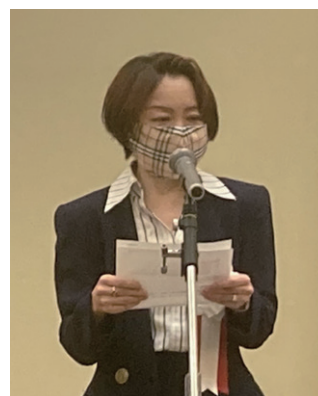
「中国地域は森林が多く、国産材の活用が共通課題となってきました。戦後の植林で豊かに育った人工林は、住宅や建築物に使ってこそ資源循環型社会の実現となり、資材・流通の川中から住宅・建築の川下まで幅広い産業から会員が集まる木住協ならではの活動には大いに期待しているところです。」

まだ木造応急仮設住宅の協定も未着手であり、これから各県との接触を開始しますが、この機会に協会本部のご支援も仰ぎ、防災に限らず、住宅・まちづくり全般で地元県市と普段から密接な連携を進めて参りたいです。

また、支部会員どうし地域の特性を生かした活動を行っていただくとともに、他の9支部との交流も深め、互いに良いところを学び合いながら協会全体の活性化につなげていきたいと考えております。

木住協中国支部に寄せられたご期待に応えるべく精一杯頑張りますが、お集まりの皆様におかれましては、今後とも引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願いし、支部を代表してのご挨拶とさせていただきます。」

最後に越海興一専務理事より閉会の挨拶を行い、設立総会は終了となった。



中国支部支部長に選任された堀川氏

中国支部 支部長・副支部長・幹事

役 職	代表者氏名	会社名	代表者役職名	会員種別	所在地
支部長	堀川 智子	中国木材（株）	代表取締役社長	2種B正会員	広島県
副支部長	野津 基弘	ライフデザイン・カバヤ（株）	代表取締役	1種A正会員	岡山県
幹事	渡部 智司	（株）いちい	代表取締役	1種C正会員	島根県
同	道下 幸治	（株）道下工務店	代表取締役	1種C正会員	広島県
同	中島 浩一郎	銘建工業（株）	代表取締役社長	2種B正会員	岡山県
同	青山 直充	住友林業（株）広島支店	支店長	1種A正会員	広島県

令和4年9月5日現在、順不同、敬称略



食と住まいの情報発信基地拠点として ガスで叶える豊かな暮らしを五感で 体感できる「ハグミュージアム」

110余年前に大阪の地にガス灯を灯すことから始まった大阪ガスの事業は、社会や環境の変化の中で地域、顧客に密着しながら、国内外でエネルギー事業を展開する“Daigasグループ”として発展。多様な商品、サービス、ソリューションの提案など“未来価値の創造”をめざしています。その大阪ガス発祥の地に2015年1月に「食と住まいの情報発信拠点」としてオープンしたのが「ハグミュージアム」です。地上5階、総面積10,148m²に及ぶ館内を、大阪ガスマーケティング株式会社(Daigasグループ)の岩田耀平氏にご案内いただきました。



エネルギーシステムから料理教室まで 見て触れて五感で体験

人(human)とガス(gas)が出会う場であり続けたいという思いを込めて名づけられた「ハグミュージアム(hu+g



ラインアップ豊富なガス調理機器を一堂に
システムキッチン6社のモデルプランも展示



3階のライフスタイルギャラリー
木質をふんだんに使って温かみのある子ども部屋の提案も

MUSEUM)」。京セラドーム大阪と大型ショッピングセンターに隣接した賑わいの中にありながら、館内は広々と開放的で木質も多様に取り入れられて安らぎを感じることが出来ます。

フロアごとにテーマが設定され、1階は世界の天然ガス事情や環境性、大阪ガスネットワークの安心安全への取り組みを映像や体験を通して分かりやすく紹介。2階にはイベントスペースやカフェ、調理体験のできるスペースもあります。“ちょっとミライの暮らし”を体験できるスマートハグホームや、発電と給湯を可能にした家庭用燃料電池システム「エネファーム」を詳しく紹介する「創エネギャラリー」が目を引きます。

その他にも家庭の給湯や暖房に関するガス機器や、ガスを通じて「食」に関する情報を発信し料理レッスンもできる「食の体験フロア」、業務用厨房機器などガスに関するすべてを網羅したショールームを超えたショールームといえます。

社会貢献活動の一環として 地域の小学生が屋上で“稲作体験”

Daigasグループでは「SDGs(持続可能な開発目標)」や「地域共創」への積極的な取り組みを行っていますが、ハグミュージアムでもその一環として毎年、広い屋上スペースを利用して水田を作り、地域の小学生たちとともに“稲作”を実施しています。子どもたちは実際に田植えを体験して、

草取りなどしながら稲の成長を見守ります。取材した8月には稲の背丈も伸びて、子どもたちは秋の稲刈りを楽しみにしているそうです。収穫した米は精米してガス炊飯器で炊いておにぎりにして食べるとのこと。都会で育つ子どもたちにとっては農業と自然に触れる貴重な体験。子供たちの感動や喜びの声がたくさんの手紙として届けられています。

ハグミュージアムにもう一つ、“育む(ハグくむ)”という意味もあるのでは…と思わせるエピソードでした。

「ガスを通じて人々の豊かな暮らしと安心・安全の環境づくりへの情報発信の拠点として、ハグミュージアムをさらに地域と連携しながら充実させていきたい」と、岩田氏は

大阪ガス発祥の地に誕生した新たな拠点に期待を寄せています。



地域交流と環境について考える場としても
田植えから刈り取り、食の体験までできる屋上の稲田

Topics 1

地球にやさしい

“創エネシステム”エネファーム

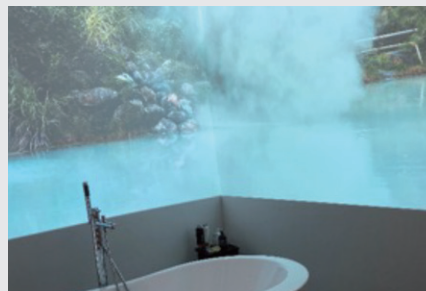
混迷の続く世界のエネルギー問題やCO₂削減の必要性が迫られる中、注目されるのが大阪ガスの自家発電&給湯システム「エネファーム」。都市ガスやLPGガスから取り出した水素と空気中の酸素を化学反応させて電気をつくり出すシステムで、その発電効率は世界最高クラスといわれています。また発電時に発生する熱を利用して給湯や床暖房もできるので経済性も抜群。エネファーム1件で年間、杉の木約160本分のCO₂を削減できる環境性も、地球の温暖化防止に貢献するものです。ハグミュージアムの創エネギャラリーでは、このようなエネファームの仕組みやメリットを図解や実物展示で分かりやすく紹介しています。



Topics 2

ちょっとミライのバスルーム

「こんなお風呂があったら、どんなに入浴が楽しいだろう!」と思わずにはいられない。2階のスマートハグホームには、そんなバスルームが展示されています。一見、普通の浴室という感じですが、浴室に入るとその人の血圧や心拍数などからAIが自動的に体調をチェック。それによって「ちょっと疲れていますね」や「今日もお元気ですね」などのメッセージとともに、体調に相応しい動画を選ぶことができるという仕組み。たとえば疲れている人には壁面が露天風呂の風景になったり、元気な人には壁面いっぱい花火が広がったり…。思わず長湯をしてしまいそう。このようなバスルームが一般家庭にも実現する日が近いことでしょう。



大阪ガスマーケティング株式会社

大阪市中央区平野町四丁目1番2号
TEL. 06-6205-4667
FAX. 06-6209-8215

Daigas グループ「ハグミュージアム」

大阪市西区千代崎3丁目南2番59号
TEL. 06-6586-3789
開館時間：10時～18時
休館日：水曜日（祝日の場合開館）、年末年始、夏期

「令和3年度自主統計および 着工統計の分析報告書」まとまる

業務・広報委員会（村岡照生委員長）はこのほど、「令和3年度木住協自主統計および着工統計の分析」結果をまとめ、報告書として発行した。1種 A、B、C 会員を対象に、令和3年度（令和3年4月～令和4年3月）に建設した木造軸組住宅の住宅着工戸数をアンケート形式で集計したもので、今回で33回目の調査となった。調査結果によると、平成28年省エネルギー基準適合住宅（平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む）が木住協戸建て住宅の75.4%、また長期優良住宅は38.7%を占め、依然と高い水準で推移しており、住宅の質向上に貢献していることが分かった。

調査は令和4年5月1日現在の471社の1種会員を対象に実施し、このうち1種 A 会員105社、同 B 会員230社、同 C 会員61社の合計396社から回答を得た。回収率は84.1%となり、前年度より3.5ポイント増えた。その結果、1種会員が建設した木造軸組住宅は戸建て住宅が87,304戸（前年度比5.6%増）、共同住宅が5,870戸（前年度比46.6%増）となり、合計では93,174戸（前年度比7.5%増）となった。

国交省がまとめている住宅着工統計に占める1種会員のシェアは19.5%となり、前年度比0.5ポイント減となったが、ほぼ5棟のうち1棟は木住協会員の住宅と言える。同様に地域別シェアをみると関東が24.4%と最も高く、中部22.8%、四国17.8%、沖縄17.5%、中国の16.5%などの順。沖縄は令和2年度の10.4%対し大きく増加となった。

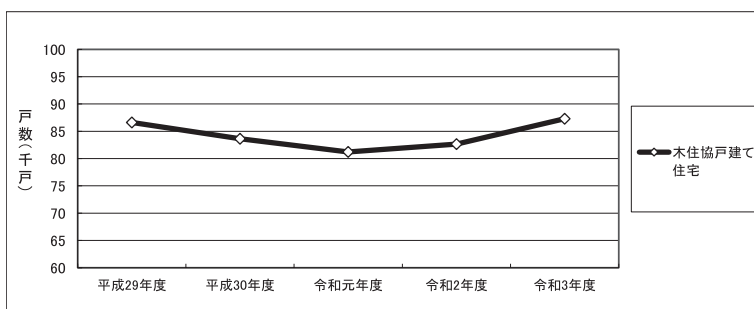
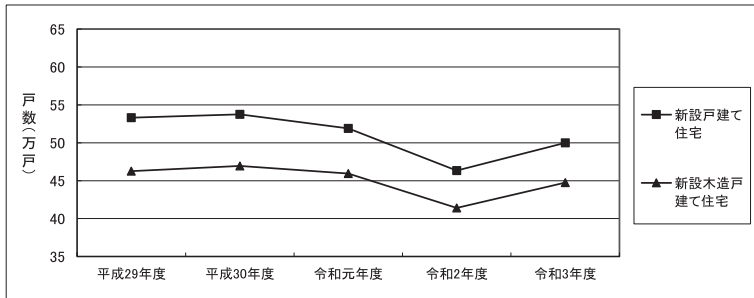
戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅は65,819戸で、戸建て住宅の75.4%を占めた。前年度よりも5.8ポイントダウンしたものの、70%以上は5年連続となる。因みに木住協の戸建て住宅に占める平成28年省エネルギー基準適合住宅の割合は、平成28年度が66.7%、平成29年度が74.2%以降、平成30年度80.5%、令和元年度82.6%と高い水準で推移している。省エネ性能の向上から、1種会員が平成28年省エネルギー基準適合住宅に切り替えを進めていることが窺える。木住協戸建て住宅に占める地域別シェアは、北

陸の89.3%、四国の86.0%、北海道の85.8%、沖縄の83.7%、中国の81.3%の順となり、5地域で80%を上回った。

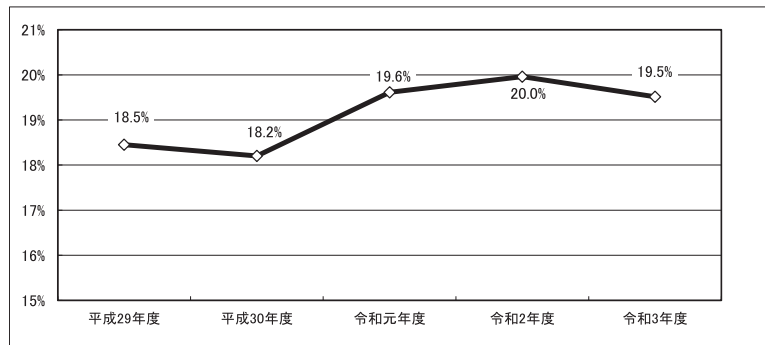
品確法に基づく設計評価住宅は26,267戸、建設評価住宅は17,643戸で、着工統計の全国戸建て設計評価、建設評価住宅に対する木住協シェアは設計評価住宅が19.9%、建設評価住宅が19.2%といずれも前年度より上昇した。また、木住協戸建て住宅に占める木住協設計評価住宅、同建設評価住宅の割合は、全国戸建ての同割

戸建て住宅（長屋を含む）着工戸数推移

	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
木住協戸建て住宅	86,618	83,624	81,216	82,647	87,304
うち木住協3階建て戸建て住宅	3,251	5,735	7,256	8,650	8,376
うち平成28年省エネルギー基準適合住宅（平成25年省エネルギー基準適合住宅含む）	64,290	67,349	67,109	67,127	65,819
うち品確法に基づく設計評価住宅	28,606	20,941	19,710	21,785	26,267
うち品確法に基づく建設評価住宅	14,587	16,485	14,991	14,748	17,643
新設戸建て住宅	533,081	537,523	518,890	463,350	499,985
品確法に基づく設計評価住宅	108,482	126,930	129,208	115,415	131,962
品確法に基づく建設評価住宅	82,523	88,970	105,910	98,475	96,065
新設木造戸建て住宅	462,574	469,467	459,425	414,072	447,428
うち新設木造3階建て以上戸建て住宅	26,363	27,956	29,342	24,357	26,177



木造戸建て住宅における木住協シェアの推移



合よりそれぞれアップとなった。

長期優良住宅の建設戸数（戸建て）は33,776戸となり、木住協戸建て住宅の38.7%を占め、前年度調査より4.4ポイントの増加となった。また全国戸建て住宅に占める長期優良住宅シェアが26.4%に対し、木住協会員は変わらず質の向上に大きく貢献しているといえる。

地域別にみて長期優良住宅のシェアが高かったのは九州の58.7%で、近畿の56.1%、中部の53.1%、東北の45.6%、四国の40.9%と続いている。逆に低かったのは北海道で20.7%、関東で25.5%、だった。

太陽光発電搭載住宅の建設戸数は23,272戸で、戸建て住宅建設戸数の264.7%を占め、前年度調査より2.0ポイント上昇した。ZEH（ニアリー ZEHを含む）の建設戸数は15,883戸となり、戸建て住宅建設戸数の18.2%を占め、前年度調査より5.0ポイント上昇したことにな

る。ZEH適合住宅の地域別割合は、中国が32.0%と最も高く、近畿の27.1%、四国の26.9%、九州の26.4%の順で、低かったのは北海道の5.7%、沖縄の0.3%だった。

3階建て以上戸建て住宅では、国交省の調査では26,177戸と昨年度より1,820戸の増加であったが、木住協では、8,376戸となり、昨年調査時より274戸の減となり、木住協内シェアも3.5ポイントの減となった。国交省は3階建て以上戸建て住宅の調査は令和3年度までで4年度よりは行わないとのことであった。

木造共同住宅の建設戸数は5,870戸となり、前年度より46.6%増加した。新設木造共同住宅に占める木住協シェアは10.6%で、前年度より3.1ポイントの増加となった。建設戸数のうち平成28年省エネルギー基準適合住宅は4,813戸で共同住宅の82.0%を占め、前年度と比べて12.6ポイントの増加となっている。また、共同住宅1戸あたり平均床面積は36.1㎡で、前年度より1.2㎡縮小した。新設住宅着工の平均床面積は35.1㎡で、木住協共同住宅が0.9㎡広い結果になった。地域別では東北が66.6㎡で最も広く、次いで北海道の63.4㎡、中部の55.8㎡、四国の49.5㎡であった。また、もっとも戸数が多い近畿の着工戸数は4,493戸、平均床面積は36.1㎡、関東は1,093戸、32.7㎡であった。沖縄は共同住宅の着工は2年連続ゼロだった。

木住協戸建て住宅における平成28年省エネルギー基準適合住宅（平成25年省エネルギー基準適合住宅を含む）の推移

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
木住協戸建て住宅戸数	戸数	86,618	83,624	81,216	82,647	87,304
	平成29年度比	100.0	96.5	93.8	95.4	100.8
平成28年省エネルギー基準適合住宅戸数	戸数	64,290	67,349	67,109	67,127	65,819
木住協戸建て住宅に占める平成29年省エネルギー基準適合住宅シェア		74.2%	80.5%	82.6%	81.2%	75.4%

認定長期優良住宅（戸建て）着工戸数

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
住宅着工統計 新設住宅（戸建）	戸数（A）	462,574	469,467	459,425	414,072	447,428
長期優良住宅建築等計画の認定（戸建て）	戸数（B）	105,489	108,800	107,389	100,503	118,289
住宅着工統計新設住宅（戸建）に占める認定長期優良住宅シェア	（B/A）	22.8%	23.2%	23.4%	24.3%	26.4%
木住協戸建て住宅	戸数（C）	86,618	83,624	81,216	82,647	87,304
木住協長期優良住宅	戸数（D）	35,413	30,241	30,938	28,318	33,776
長期優良住宅建築等計画の認定に占める木住協シェア（D/B）		33.6%	27.8%	28.8%	28.2%	28.6%
木住協戸建て住宅に占める認定長期優良住宅の割合（D/C）		40.9%	36.2%	38.1%	34.3%	38.7%

太陽光発電搭載住宅（戸建て）着工戸数

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
木住協 太陽光発電搭載住宅	戸数（A）	29,962	23,796	23,946	20,447	23,272
木住協 戸建て住宅戸数	戸数（B）	86,618	83,624	81,216	82,647	87,304
木住協戸建て住宅に占める太陽光発電搭載住宅シェア（A/B）		34.6%	28.5%	29.5%	24.7%	26.7%

ZEH適合住宅（ニアリーZEH適合住宅を含む）（戸建て）着工戸数

		平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
木住協 ZEH適合住宅	戸数（A）	17,728	9,648	9,251	10,877	15,883
木住協 戸建て住宅戸数	戸数（B）	86,618	83,624	81,216	82,647	87,304
木住協戸建て住宅に占めるZEH適合住宅シェア（A/B）		20.5%	11.5%	11.4%	13.2%	18.2%

福島県と 「木造応急仮設住宅の建設に関する協定」を締結

木住協は、各都道府県との間で「災害時における木造応急仮設住宅の建設に関する協定」の締結を急いでいるが、2022年6月17日に福島県との間で建設協定を締結した。福島県内で災害が発生した場合、県地域防災計画などに基づいて木造応急仮設住宅を迅速に建設するための協定となる。2013年の静岡県を皮切りに、今回福島県で19都府県目、東北地域では2県目の締結となった。



右から 日本木造住宅産業協会 越海専務理事、福島県建設業協会 長谷川会長、福島県土木部 曳地土木部長、日本ログハウス協会 芳賀沼会長、全国木造建設事業協会 大野理事長

建設協定書は内堀雅雄知事と市川晃会長名で締結された。全11条で構成され、福島県内で災害などが発生して木造応急仮設住宅の建設が必要とされた場合、県は建設場所や戸数、規模、着工期日などを木住協に連絡する(3条)。木住協は県からの連絡を受けた時には、会員である建設業者の斡旋といった協力を行い(4条)、木造応急仮設住宅を建設する(5条)こととしている。

建設戸数は災害発生1ヵ月後に500戸、2ヵ月後に累計1,000戸、3ヵ月後には同2,000戸を見込んでおり、半年後までに合計5,000戸の木造応急仮設住宅を建設する計画。

協定締結時には、福島県庁にて、県側からは曳地利光・土木部長、大竹健義・土木部次長他、県幹部、事務局が出席、木住協からは、越海興一・専務理事、櫻井哲典・東北支部長、萩原俊・支部事務局長、本部から五十嵐雅彦・特命担当部長が参加。

この日の締結式には、一般社団法人 福島県建設業協会、一般社団法人 全国木造建設事業協会、一般社団法人 日本ログハウス協会も参加し、全4団体で締結式を行った。

木住協の強み「多彩な会員企業」が力を合わせて

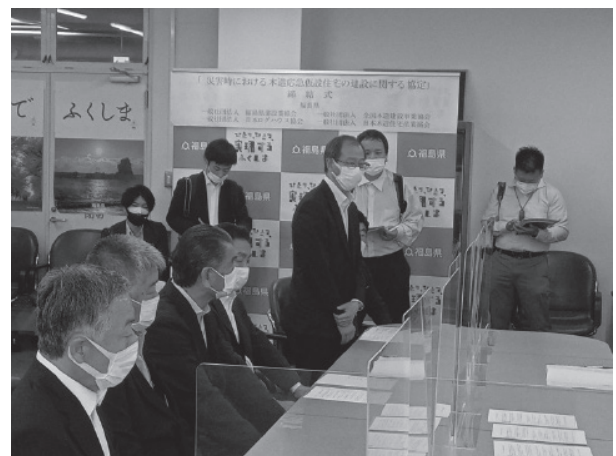
式上、木住協・越海専務理事から協定締結のお礼とともに

に、今後の活動について力強い決意を以下のように述べた。

「先の東日本大震災の際には、政府の要請を受け、木住協会員各社の協力のもと、1,596戸の木造応急仮設住宅を建設し、そのうち福島県内では250戸を会津美里町に完成させました。この経験を踏まえ、私ども木住協の強みである全国に展開する多彩な会員企業が力を合わせることで、有事の際の対応を行って参ります。災害時に都道府県のお役に立てるよう、木住協は協定の締結を進めており、これまで18の都府県と協定を結びました。

本日、福島県との間に『災害時における木造応急仮設住宅の建設に関する協定』を結ぶことが出来ました。東日本大震災の余震と思われる比較的大きな地震の発生も心配されるなか、県内で災害が発生した際、被災者の方から要望の高い、木造による仮設住宅の迅速な建設に資する大変意義のある協定であります。

内堀知事をはじめ福島県ご当局におかれましては、この間、綿密なご指導、ご協力を賜りました事、この場を借りて御礼申し上げます。協定の締結後も、福島県とは日頃から緊密な連携を図り、連絡体制等について十分な協議を行っていく所存です。」



開会式で挨拶をする越海専務理事



締結式開会式の様子

協定締結の概要

1. 協定締結の目的

①災害への備えの強化(大量供給の体制整備)

災害はいつ、どこで、どの程度の規模で起こるか分からないこと、また、将来、巨大地震の発生も想定されていることを踏まえ、速やかに供給できる体制を強化します。

②居住性が高い「木造」仮設の供給体制の整備

東日本大震災における地元業者による木造仮設の建設により、県産材の使用など地域資源・産業の活用に繋がったことや、入居者から好評を得たことを踏まえ、「木造」仮設を供給できる体制を整えます。

2. 協定締結(R4.6.17)の相手先(県は次の団体とそれぞれ締結)

- ・一般社団法人 福島県建設業協会
- ・一般社団法人 全国木造建設事業協会
- ・一般社団法人 日本ログハウス協会
- ・一般社団法人 日本木造住宅産業協会

3. 協定の内容

- ・災害救助法に定める木造による応急仮設住宅の建設

4. 協定締結の背景

東日本大震災(H23.3.11)では、最大震度6強の大地震と津波により、県内住宅被害は全壊が1万5,468棟、半壊が8万3,309棟に上り、さらには原子力発電所事故により多くの方が県内外へ避難を余儀なくされました。

応急仮設住宅の建設については、県と災害協定を締結している(一社)プレハブ建築協会へ要請しましたが、被災3県からの要請数が多く、プレハブだけでは対応が困難となりました。このため、県は県内事業者を対象に公募し、約6,800戸を供給しました。公募では、木造住宅が主体となり、地域特性に精通した地元の住宅産業のノウハウの活用や災害対応への参画、地域資源の活用に繋がりました。

5. 協定相手先の要件

実効性の観点から1)～3)の要件を満たすことを確認しました。

1) 木造仮設の供給実績(実務経験)

- ① 供給能力(機動力)・建設日数(迅速性):100戸以上を原則50日以内に完成(※)
- ② コスト低減(経済性):解体までの総費用が原則700万円/戸以下(※)
- ③ 再利用(環境面):使用材料(一部で可)の再利用が可能 ※東日本大震災の実績と同等

2) 組織体制(継続性)

- ・継続的・組織的に活動している協会等の「団体」であること

3) 県内事業者(地域密着性)

- ・県内事業者の参画、県産木材等の活用(調達)、建設後の迅速な修繕等の観点から、県内に本店のある建築事業者が所属(複数者)すること。



木造ハウジングコーディネーター

木住協NOW
連載

奮闘記



住宅営業職へ転職を機に資格取得。 「基礎知識が得られた」と語る (株)アイ工務店の岡本紘一郎さん

今回の「木造ハウジングコーディネーター奮闘記」は、今年5月の新規展示場オープンを機に大阪から福岡へと単身で異動した、株式会社アイ工務店(本社=大阪市中央区、松下龍二社長、1種B会員)の岡本紘一郎さん(43歳)に登場していただいた。現在は、福岡支店福岡営業部部長として東奔西走の毎日を送っている岡本さんは、初めて営業職に就いた時に木造ハウジングコーディネーター資格試験に合格。「その後の木造住宅の営業活動に大いに役立ちました」と語っている。

岡本さんは大阪府箕面市の出身。通っていた学校は建築系ではなかったが、卒業後に以前から興味があった建築業界の技術畑に飛び込んだ。そこで建築について基礎知識から独学で学び、住宅をはじめ、商業施設や事務所建築の設計・工事監理の業務に携わったという。「好きなことができる喜びが感じられ、仕事が楽しかった」と岡本さんは当時を振り返る。

アイ工務店に入社したのは、2013年。会社を立ち上げられた現在の代表取締役会長の田中亘会長に声をかけられたのがきっかけだった。今春まで営業職として本社のある大阪に勤務していた。出展社数37と九州最大級の規模を誇る「マリナ通り住宅展示場」へ、5月のグランドオープンを機に福岡営業部部長として着任。福岡の地を盛り上げている。

技術畑から営業畑への転職が 資格取得のきっかけに

初めは技術職として建築業界に入った岡本さんだが、30歳を過ぎたころに、もっとお客様と深く関わりたいと思うようになり、営業職としてハウスメーカー(前職)に転職。その時に木造ハウジングコーディネーター資格

制度を通じ、営業に関する知識を基礎から学んだという。

木造ハウジングコーディネーター資格試験を岡本さんが受験したのは、2011年(平成23年)の12月のこと。当時の会社からの勧めで、2日間の講習を受講した上で、試験日の半月前からテキストや想定問題集を読み続けた。

「技術職の経験があったので、技術編はさほど難しいとは思いませんでしたが、自分の知識の振り返りに役立ちました。営業編はわからないことも多かったのですが、一生懸命勉強したので、合格発表時に自分の受験番号を見つけた時はホッとしましたね」と笑顔で話す岡本さん。合格して営業職としての自信がついたことが、その後の木造住宅の営業活動にとってもいい影響を与えてくれたという。

岡本さんの名刺には建築士などこれまでに取得した資格が記されているが、もちろんその中に木造ハウジングコーディネーターの文字もある。頭に「木造」とあるので、木造住宅に関しての見識があるとわかり、お客様から信頼が得やすいそう。そのおかげでスムーズに商談が進むこともしばしばあるという。

お客様と商談をする時には、記憶に残る印象的な商談となることを心掛けるという岡本さん。特に競合他

社が多い場合に自分の会社を選んでもらうためには、この心掛けがとても大切になってくるので、説明の仕方や内容も工夫している。

「最初のころは、技術的な専門用語も使いお客様に理解していただくとしていましたが、木造ハウジングコーディネーターで学んでからは、お客様にわかりやすい言葉で説明することを心掛けるようになりました」

また、岡本さんは、木造住宅の良さを理解していなかったり、専門用語の知識が少なかったりすることが多い営業職の新人社員にも、木造ハウジングコーディネーターの受験を勧めている。

「これからの住宅営業は、建築技術に関する知識を備えていないと務まりませんが、木造ハウジングコーディネーター資格試験のテキストなら、技術面に加え、省エネの大切さや木造建築の構造についてなど、幅広く学ぶことができます。営業職の資質向上には最適の内容だと思いますね」と力強く話す岡本さん。豊富な技術知識と木造住宅の営業センスを兼ね備えた岡本さんの言葉だけに、非常に説得力がある。

地域密着性が高い地域だからこそ こだわりがある

営業部部長である岡本さんの1日は、営業担当との朝のショートミーティングから始まる。ミーティングでは、お客様の状況報告や確認、進捗のチェック、今後の商談の進め方などについて討議を行う。この時に岡本さんが気をつけているのが、営業担当個々の意見を最重要視すること。そうすることで個々の能力を最大限に発揮させ、全体の営業レベルを高めているという。また、アイ工務店ではヒアリングからプレゼンテーションまでを営業担当が担っており、岡本さんは物件の難易度と営業担当の能力など総合的に判断して、必要に応じて商談に同席したり、プラン作成時の助言やチェックを行ったりもしているという。

また、事務所と併設している「マリナ通り住宅展示場」で自ら接客することもある。直接お客様と接することは、岡本さんにとって初めての赴任地である福岡の地域性を知るのにも役立つという。



さらに、そのあと土地調査や建築現場の確認をしたり、地元の不動産会社をまわったりして、事務所に戻れるのは夕方を過ぎてから。その後も営業担当から報告・相談を受けるなど、多忙な日々を過ごしている。

そんな中で、営業担当に常々声をかけているのが、建築にもっと興味を持ってほしいということ。せっかく素敵な建築物が多い地域にいるのだから、そのメリットを生かしてほしいと考えているのだ。

「そして何より、営業的にうまく行っていない時でも、仕事を楽しんでもらいたいと思っています。是非、毎日前向きな気持ちで出社してほしいですね」

木造住宅・建築物の良さを もっと広めたい

岡本さんは、営業部のある福岡市西区から車で約10分のマンションでひとり暮らしをしている。休日でも考えるのは仕事のことばかり。仕事のことやお客様のことが頭から離れず、休息する時間はないという。

「多くのお客様にとって、家づくりは初めての経験ですし、人生最大級の買い物になります。それゆえにお客様の期待は大きくなりますが、その要望に120%で応えたいといつも思っています」と岡本さん。

自然素材の木には化学製品にはない魅力や温もりがあり、木造住宅が健康住宅であることを常々アピールしており、多くのお客様がとても喜ばれるセールスポイントとなっている。しかし、木造住宅の場合は現場の職人が手作業で調整する部分も多く、若干とはいえ誤差が生じることがあり、お客様にそれを受け入れていただけないことも。

「お客様に納得していただけるように手直しをしても100%お応えすることができず、何度も修正することになり辛い気持ちになることがありました。お客様の要望を速やかに理解し修正することが最優先ですが、どうしてもできないものは、お客様に納得していただける解決方法を提案できるスキルを身につけていきたいと考えています」

これからも木造住宅営業の最前線で活躍していきたいという岡本さん。「お客様に心から喜んでいただける家造りに、生涯取り組んでいきたいです」と強い決意を語ってくれた。

日本木造住宅産業協会 住まいのトレンドセミナー
2022年10月4日【第1部】

「木造住宅外皮の防水設計・施工指針 および防水設計・施工要領(案)」概要説明

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科教授 輿石 直幸氏

早稲田大学理工学術院 輿石教授が、
「木造住宅外皮の防水設計・施工指針および
防水設計・施工要領(案)」概要説明を
zoomで講演

●セミナー要旨

資材・流通委員会(澤田知世委員長)は、令和4年度 第5回の「住まいのトレンドセミナー」を令和4年10月4日にzoomセミナーとして開催しました。今回は1部と2部に分け、第1部で早稲田大学理工学術院 輿石教授が「木造住宅外皮の防水設計・施工指針および防水設計・施工要領(案)」の概要説明を行いました。



輿石教授はまず初めに、2020年度末に日本建築学会から発刊した本指針・要領(案)の経緯を説明しました。「木造住宅は、元来、構造体の軸組が屋内外に露出した真壁構法で、高温多湿な気候に適した構造でした。時が経ち、都市不燃化の観点から、外壁にセメントモルタルを塗って軸組を覆い隠す大壁構法が普及しました。当初、筋かいを配置し、壁の下地には小幅板を用いていたため、壁体内の通気性は良好でした。その後、耐震性の向上を意図し、耐力面材として構造用合板などを用いた構法が登場し、さらに、省エネのため高气密化・高断熱化が段階的に強化されました。その結果、壁体内に一旦、雨水が浸入するとなかなか乾燥せず、木材が腐朽しやすい多湿な環境が形成されやすくなりました。これにより、近年では築後早期に木部腐朽が生じる事例が多発しています。今日でも、戸建木造住宅では、設計技術資料や施工標準の整備が遅れています。そもそも、設計図書に材料や納まりが記載されおらず、施工管理や工事監理がなされていないことも多くあります。また、工事工程や職種が複雑に入り組み、責任

の所在が曖昧な側面もあります。さらに、日常点検や補修・改修の実施を専門家ではない居住者に依存しているなど、建築生産の体制・仕組そのものにも、こうした問題の原因が潜んでいます。このような状況を受け日本建築学会では、2011年度に「住宅外装の防水設計・施工指針検討小委員会」を立ち上げ、2020年度末に本指針・要領(案)を発刊しました。201項目の劣化リスク要因を抽出・分類し、各要因に対し想定される現象・問題点、さらにリスク回避または対応措置といった基本的劣化抑制方策を整理し、一覧表も掲載しています。また、この考えに基づき設計・施工を実施する際に、参考となる技術情報を事例シートにまとめて掲載しています」。

本指針・要領(案)は7つの章で編集されていますが、今回はセミナー内で全体把握ができるように、1章の『総則』、6章の『劣化抑制に向けた基本的方策』、7章の『劣化リスク要因一覧表』の説明がありました。「まず本指針の位置付けですが、屋根や外壁などの外皮を対象とし、浸入雨水

や外皮内部に生成した結露水などによる、構造部材、下地材などの木部の腐朽を防ぎ、木造住宅の長期使用を可能にするための防水設計・施工の基本的な考え方を示すことを目的としています。室内への雨水の滴下・漏出、内装の汚染など、目視で確認可能な水に起因した被害に限らず、木造住宅の耐久性を損なう要因としての水・湿気にかかわる作用の全般が対象です。適用範囲は、新築工事を対象としますが、補修・改修工事にも適用可能な内容を含んでいます。主体構造は木造を対象としますが、鉄骨造であっても層構成が同様であれば、構造体屋外側の構成部材にも適用できる内容もあります。構造は、軸組構法と枠組壁工法を対象としますが、壁の層構成が直接関係しない内容については真壁構法にも適用することができます。主として居住専用の戸建住宅を対象としますが、住宅の形式が直接関係しない内容については長屋形式や積層型の共同住宅、店舗兼用住宅、別荘などにも適用することができます。防水以外の性能との関係および推奨仕様は、構造耐力、防火、断熱、耐久性などの基本性能を確保することを前提としています。また、本指針で推奨する仕様では、既存の材料規格・仕様書・基準類と同等もしくはより上位のものを想定しています」。

『劣化抑制に向けた基本的方策』では、表、図、写真、フローチャートなどでわかりやすく説明がありました。「まず、劣化抑制の目的と手順ですが、木造住宅の設計、施工、使用、維持保全の各過程において、水分に起因した劣化リスク要因が多数存在します。住宅を長期間使用する間、これらのリスクの存在による偶発的な不具合や早期劣化の発生は避けられません。そのため、建設から除却までの期間、必要な点検や補修を行って性能や資産価値を維持しつつ、供用年数に対するライフサイクルコストの比を低くすることが合理的です」。次に、フローチャートを使つての説明があり、「リスク要因分析においては、まず計画に含まれるリスク要因のうち、想定される不具合の重大性、発生確率などから、通常より高いリスクを形成すると考えられる要因の有無について検討します。高リスク要因が含まれている場合、不具合の発生リスクを低減するための代替案が採用できるかどうかを検討します。元々、高リスク形成要因が含まれない場合、および代替案の採用により回避できる場合は高リスク形成要因が含まれない計画となり、初期コストが抑制され、点検や補修を最小限にとどめることが可能になります。また、高リスク要因を残したまま計画を進める場合は、不具合を抑制するための特段の対応策を講じる必要が生じます。この対応策は初期コストの増大を招くとともに、点検および補修の頻度も増すことになります。

一方、計画時にリスク要因の認識が不足し、あるいは無視して工事が行われた場合、高い確率で早期劣化が発生し、大規模な改修を行うか解体を余儀なくされる場合もあります」。

「建築基本計画におけるリスクの回避については、木造住宅の雨漏り事故や結露被害などの分析によると、不具合のあった建物では、基本計画において特定の部位や納まり形態、層構成および工事方法に関係する要因がある程度、共通的に存在することが明らかになっています」と言い、敷地、平面計画、立面・断面計画、外皮詳細計画・納まり、工事計画・方法・工程、材料・部品などそれぞれに、リスク要因、多発する問題、代替案を、表と図、事例写真などでより具体的な説明がありました。「代替案を選択できるのは、次の二つの条件が必要となります。①当該住宅の設計と条件（敷地、床面積、所要性能、意匠、予算など）の大幅な変更を伴わない。②発注者の合意が得られることです」。高リスク要因を回避できない場合は、劣化抑制のため有効な設計・施工上の措置を講じることになります。「有効な措置は、以下の①～⑨のいずれか、または組合せです。①特段の高防水性・高耐久性を有する仕上材、防水工法および部材の適用 ②劣化環境を改善する計画・構造措置（排水、通気、換気） ③防水施工性を確保する構法計画 ④適切な工事方法の採用および適切な工事管理の実施 ⑤防水施工検査および工事監理の実施 ⑥劣化対策設備の設置 ⑦維持管理容易性の配慮 ⑧モニタリングシステムの設置 ⑨居住者への情報伝達です」。

7章の『劣化リスク要因一覧表』は、201項目のリスクに対して、リスクを高める要因やリスク回避もしくは適切に対処する方法を一覧にし、本文の詳細ページも記載したわかりやすい表です。「設計・施工に携わる人でも、木造住宅のリスクを理解していない人が多いです。一般の人にもわかってほしいので、説明のパンフなども発行しています。水分にまつわる木造住宅の劣化に関する研究は、途に就いたばかりであり、現時点での知見には不完全な部分があります。技術の進歩とともに変化するものでもあるので、さらにバージョンアップする必要があると考えています」と、今後の抱負を語りました。

日本木造住宅産業協会 住まいのトレンドセミナー
2022年10月4日【第2部】

「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究紹介」

千葉工業大学 創造工学部 建築学科准教授 石原 沙織氏

千葉工業大学 石原准教授が、
「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究紹介」
をzoomで講演

●セミナー要旨

資材・流通委員会(澤田知世委員長)は、令和4年度 第5回の「住まいのトレンドセミナー」を令和4年10月4日にzoomセミナーとして開催しました。今回は1部と2部に分け、第2部で千葉工業大学 石原准教授が「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究紹介」を行いました。



石原准教授は、3年前から学生たちと研究を続けている「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究」について、その成果の一部を発表しました。

まず初めに、2019年の台風で大学のある千葉県が受けた屋根被害をデータで説明しました。「2019年の台風15号と19号で、私たちの大学がある千葉県内でも大きな被害が発生しました。15号の被害は主に暴風によるもので、19号は大雨と暴風によるものです。観測史上1位の値を更新した地点が多くありました」。千葉県内の鋸南町の写真を見ながらの説明は、「15号の後の被災状況です。多くの家屋の屋根にブルーシートが被せられ、屋根の被害率は鋸南町約56%、南房総市約61%、館山市約45%と、かなり多くの被害が発生しました。15号と19号の住家の屋根被害について屋根葺材別の割合ですが、対象住家は元々瓦葺きの屋根が6割強と多く、そのうち屋根被災は、瓦(粘土葺き)が64%、瓦(釘・スクリュー)が56%、瓦(留め方不明)が63%になり、瓦葺きではかなりの被災があったということがわかります。金属屋根は27%、スレートは

28%で、瓦葺きに比べると割合は小さいですが、被害はそれなりの数が発生しました」。建築年代別の屋根被害もグラフで表示。「築30～60年になると約60%に被害が発生しています。それより築年数が浅いものは、50%以下です。年代が新しくなると屋根被害率は低減することから、経年劣化が主な原因だと思われるのですが、もう一つ、築30年以降から被害率が高くなるのは、戸建住宅の寿命が30年程度という暗黙の概念があって、メンテナンス計画がもしかしたら30年まででストップしているのではないかとデータを見て思いました。もしそれが要因の一つで、このままのやり方を続けていけば、一向に日本の戸建住宅の寿命は延びていかず、資産価値も向上しません。台風の度に被災する住家が、減少することなく増えていくということが懸念されます。気象はさらに激甚化しているので、今後も被害が大きくなることが予測されます。次に1989～2018年までの住宅屋根材使用比率をグラフで見ると、近年では瓦に代わって化粧スレートや金属の屋根材が増えてきています。特に化粧スレートは割れが発生するなど、材料自体の耐久性が瓦や金属屋根に比べると少し

低いので、今後経年劣化していった時に、さらに被害が拡大してしまう可能性が懸念されます」。

次に、「野地板の釘引き抜き耐力に関する研究」についての発表がありました。「いずれの屋根も一般的には垂木の上に野地板を施工し、その上にルーフィング(下葺き材)を敷きのべて、これをタッカーなどで野地板に留めつけ、その上に屋根葺き材を施工して、釘やビスなどで垂木に固定します。あるいは、垂木が無いところでは野地板に固定します。2020年には日本建築学会発行のJASS12が改定され、野地板と屋根葺き材の間に通気層を設ける通気構法が掲載され、屋根全体の高耐久化の視点が盛り込まれた内容になっています」。屋根被害に話を戻して、野地板と釘の引き抜き耐力の影響について説明します。「屋根被害は葺き材自体が飛散するものと、野地板ごと飛散するものがあります。特に野地板に着目すると、小屋裏の室内側に大量の結露が発生して野地板が吸水するということがあります。また、釘の引き抜き耐力は野地板の状態に強く影響を受け、野地板が濡れていれば釘の引き抜き耐力は当然低下することが予測されます。ですから、台風15号の屋根被害は、野地板と釘との緊結力の低下で発生した被害もかなり多かったのではないかと推測されます」。

では、なぜ釘の引き抜き耐力が低下するのでしょうか？「結露や漏水により野地板の含水状態が高くなり、太陽光などの加熱により乾燥する際、膨張収縮などの変形が発生し、乾湿繰り返しによる木質材料中の接着強度が低下し、更に風などの外力によって釘の繰り返しの疲労などの影響を受けることが考えられます。実際には、これらが複合して釘の引き抜き耐力が低下すると予測されますが、研究の中で何度も予備試験を行った結果、釘の貫通部から屋内側にある水分を吸い上げ、屋外側に移動するという現象を確認しました。これは釘の引き抜き耐力に大きく作用すると予測されたので、吸水と乾燥の履歴に先ず着目し、それらを再現した実験を行って、釘の引き抜き耐力がどうなっていくか、乾湿繰り返し試験を行いました」。

試験体は、高密度合板(12mm)、中密度合板(12mm)、中密度合板(9mm)、低密度合板(12mm)、MDF(9mm)の5種類で行い、試験方法、試験後の外観変化など、図や写真での試験内容の具体的な説明がありました。「結果は、初期の含水率は試験体に因らずほぼ等しいですが、MDFはほとんど吸水しないため、含水率変化は小さいのに対し、合板の場合は含水率の変動があり、密度が低い程、含

水率の増減もばらつきも大きくなる傾向がありました。肝心の引き抜き耐力の推移は、MDFを除き1回目の浸漬による低下が大きく、その後の繰り返しによる低下はさほど見られません。板厚が薄い場合、乾燥による回復がわずかに見られますが、それ以外は変わらないか、逆に低下します。これは、湿潤時は繊維膨張による摩擦抵抗が大きくなったためと推測しています。また、密度が高いと引き抜き耐力は大きいですが、ばらつきも大きいことがわかりました。当初の予想では含水率が高くなると引き抜き耐力が低下すると考えていましたが、含水率と最大引き抜き耐力にはほとんど相関がないことがわかり、含水率は引き抜き耐力の支配的要因ではないということがわかりました」。

ここまでの実験で、新たな疑問が生じたと石原准教授は言います。「含水率が初期と同じ状態に戻ったら、釘引き抜き耐力はもう少し回復するのか？」という疑問です。それを確かめるための実験を行いました。調べた結果は予想に反して、含水率が初期と同じ状態に戻っても、吸水と乾燥を繰り返す度に引き抜き耐力は低下することがわかりました。先ほどお話した通り、この実験結果からも含水率が釘の引き抜き耐力低下の主要因ではないということがわかり、そして、吸水・乾燥により組織が脆弱化することが主要因なのか？ということが予測されました」。

さらに、もう一つの疑問が生じたと言います。「野地板は本来垂木に固定されていますが、変形を拘束したらどうなるのか？ 下葺き材や屋根葺き材があるとどうなるのか？このことを前提にさらに実験を続け、曲げ試験や剥離試験も実施しました。実験の結果、変形を拘束された野地板の最大変形量は小さくなりますが、釘引き抜き耐力が低下しやすいということがわかりました。実際の屋根は垂木に固定されていることが多く、今回の実験よりもスパンが長いので、より危険であるということが想定されます。また釘引き抜き耐力は、合板の層間の剥離強さと相関があり、初期状態に比べ繰り返し試験後では、剥離強さの低下に対する引き抜き耐力の低下が大きくなります。すなわち、吸水・乾燥の繰り返しは合板の接着強度を低下させます。合板は、単板を繊維方向が1枚ごとに直交させて、奇数枚積層接着して製造しているものですので、各単板の収縮量には違いがあります。これに風荷重などの外力(野地板への外力と釘への外力)が加わり、屋根被害につながるのではないかと推測されます。現在学生と、この外力の部分も含めて研究しているところです。また機会がありましたら、その内容についてもご報告させていただきたいと思います」と、研究の次なる目標を話しました。

探訪

日本の世界遺産

NIRAYAMA REVERBERATORY FURNACES

「明治日本の産業革命遺産」は、2015年に日本で18件目の世界遺産に登録されている。西洋の先端技術と日本の伝統技術を融合させることで、明治日本で急速な発展を遂げた製鉄・製鋼、造船、石炭産業に関する歴史遺産で、23もの遺構で構成され、8県に点在している。

今回は、日本で鉄製大砲を鑄造した反射炉の中で、唯一当時のままの姿が保存されている「韮山反射炉」についてご紹介しよう。

静岡県伊豆の国市 韮山反射炉

幕末に築造された大砲のための鉄をつくる溶解炉

「韮山反射炉」は、米国・ペリー提督の下田港来航もない安政元(1854)年、韮山代官 江川太郎左衛門英龍の建言により江戸幕府が築造を命じたもので、英龍の死後に息子の江川英敏が引き継ぎ、安政4(1857)年に完成している。欧米列強の武力に対抗するため、幕府が造成した品川台場の砲座に設置する大砲の製造が目的であった。

反射炉とは、原料鉄を溶かして大砲製造のための鉄をつくる溶解炉で、耐火煉瓦をアーチ積みした炉体部と、煉瓦積みの高い煙突からなっている。炉体の内部で燃やした炎を浅いドーム形の天井に反射させて原料鉄に高熱を集中させ、さらに高い煙突を利用して大量の空気を送り込み、炉内の温度を千数百度に上げることで、鉄製大砲に必要な軟らかく粘りのある鉄を鑄造するものである。

「韮山反射炉」は、高さ15.6メートルの連双の煙突が2基建てられ、合わせて4炉で構成されている。炉体の内部は、伊豆天城山の土を原料に賀茂郡梨本村(現河津町)で焼かれた耐火煉瓦をアーチ積みにし、外側は伊豆原産の伊豆石(緑色凝灰岩質石材)を積み上げた組構造となっている。煙突も煉瓦の組積みで、築造当初は表面が漆喰で仕上げられていた。

明治維新以降は陸軍省に移管され再び大砲を鑄造

「韮山反射炉」では、鑄造した砲身に砲穴を削り貫く鑽開作業に水車動力を用いたため、反射炉敷地脇を流れる古川を河川改修し、反射炉側へ流れを蛇行させ、取水口から木樋で水車に水流を供給した。この改修した古川の取水起点から水車を経て水流が再び川に戻る合流地点までの144メートルも、世界遺産の登録範囲に含まれている。

江戸末期の安政から万延年間に、鉄製カノン砲が製造

されたが、大政奉還により反射炉の操業は停止された。一旦は幕府から払い下げられて江川家の私営となったが、明治維新以降、陸軍省に移管されて再び大砲の鑄造が行われた。

平成27(2015)年7月に、「明治日本の産業革命遺産」

として世界遺産に登録されると、翌年、地元の伊豆の国市は「韮山反射炉」の見学のためのガイダンス施設を完成させた。このセンターでは、「韮山反射炉」の昔と今をつなぐ空間として、築造に至る時代背景や経過、現在までの保存取り組み、建築空間を生かした迫力ある映像演出や最新の調査研

究成果を紹介している。

韮山反射炉ガイダンスセンター

〒410-2113 静岡県伊豆の国市中260-1
055-949-3450
入場料 500円

世界遺産「明治日本の産業革命遺産」登録概要

構成資産：[萩] 萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡、大板山たたら製鉄遺跡、萩城下町、松下村塾
[鹿児島] 旧集成館、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝
[韮山] 韮山反射炉
[釜石] 橋野鉄鉱山
[佐賀] 三重津海軍所跡
[長崎] 小菅修船場跡、三菱長崎造船所、高島炭鉱、端島炭鉱、旧グラバー住宅
[三池] 三池炭鉱・三池港、三角西港
[八幡] 官営八幡製鉄所、遠賀川水源ポンプ室

所在地：福岡県北九州市、大牟田市、中間市、佐賀県佐賀市、長崎県長崎市、熊本県荒尾市、宇城市、鹿児島県鹿児島市、山口県萩市、岩手県釜石市、静岡県伊豆の国市

記載年月日：平成27(2015)年7月

区分：文化

登録理由：1. 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内の価値観の交流を示すものであること。
2. 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本であること。

資材・技術委員会主催 研修見学会 京都の伝統建築物と 国内初2時間耐火純木造建築を訪ねて

5月の和歌山への商品技術勉強会に続いて、近畿支部では9月9日(金)に京都への研修見学会を実施しました。曇り空に残暑も少し和らいて感じられるなか、会員各社から13名が参加しました。まず訪問したのは地元京都産の木材をふんだんに使った4階建ての耐火木造建築「京都木材会館」。続いて住友家15代家長吉左衛門友純の別邸として1920年(大正9年)に造営された一般非公開の「住友有芳園」。そして最後に、ユネスコ世界遺産でもあり観光客が引きも切らない「元離宮二条城」へ。平成～大正～江戸時代へと、木造建築の歴史をたどる研修見学会となりました。

京都木材協同組合「京都木材会館」 国内初の2時間耐火木造建築4階建て 北山杉に囲まれているような清々しさ

「日々出勤するたびに清々しい気持ちになります」。京都木材協同組合の事務局長・武石伸郎氏の開口一番の言葉がすべてを物語っているように、京都木材会館の建物は内も外も“木”で満たされています。この会館は公共建築物等木材利用促進法の適用によって建てられた国内初の2時間耐火木造建築で、平成28年3月に竣工しました。当時としては珍しい木造4階建てで延べ床面積は754.50㎡。構造材には100%京都産木材が使われ、内装にも京都産の杉や檜がふんだんに使用されています。

また1階には商店やクリニックが入り、2階の会議室で



京都の街なかに杉木立のようなユニークなデザインが目を引く「京都木材会館」

は木材や林業に関する研修会や、脱酸素社会や木を育てる意味などの環境問題を考える環境学習(出前授業も)を行うなど、地域の生活に密着した建築物としても注目されています。

京都木材会館は人通りの多い三条通りの交差点にあつて、外観の2階部分は杉木立のように立ち並ぶ木製ルーバーが印象的で人目を引きます。このルーバーは3～4階の共同住宅への延焼防止にも配慮し、燻煙処理をした難燃性が確認されたものとなっています。

木の格子戸のような扉を開けて玄関を入ると吹き抜けのギャラリーになっており、磨き抜かれた北山丸太が並び“まちなかの森”をイメージさせます。その木立を抜けるように階段を上がると2階には北山杉の戸丸太の柱や、さまざまな樹種を織り交ぜて展示した壁面など、広い空間も木質で覆われていて、京都木材協同組合の事務所と会議室などがあります。

1・2階の柱芯材は京都産の杉材で、その周りを石膏ボードで囲んで燃え止まり効果の層を作り、さらにその周りを杉材でおおうという方法で“木現しの耐火部材”を実現しまし



エントランスから2階への階段。踏板にはさまざまな樹種が使われている

た。そのような新旧の技術の結集が、武石氏の言葉通りまるで木の放つマイナスイオンに包まれているような清々し

さを感じさせてくれるのです。「木」のもつ美しさ、心地よさ、可能性を改めて考えさせられる研修となりました。



研修を受けた2階の会議室も木に囲まれ木の香が漂う



燻煙処理によって難燃性が施されたルーバー

「住友有芳園」 住友家の歴史ゆかりの地に 東山の自然に融合する名園と邸宅

人や車の行き交う鹿ヶ谷通に面した正門をくぐると、そこは緑に包まれた別世界。住友家15代家長・吉左衛門友純の別邸として大正9年(1920)に完成した、広大な庭園と書院、茶室、歴史展示館などを有する「有芳園」です。一般非公開の貴重な私邸(撮影禁止)を、音声ガイドシステムを頼りに庭園を巡り歴史展示館を拝見しました。

庭園は、平安神宮の神苑や山県有朋の別邸「無鄰庵」など京都の名だたる庭園を手掛けた庭師・小川治兵衛が力を尽くし、赤松を中心に秀麗な東山を借景に築庭されたものです。音声ガイドに従って、まず風格ある「有芳門」から庭園に入っていくと数寄屋造りの二つの茶室「空庵」「漱庵」が植え込みの中に静かにたたずみ、さらに歩を進めると桜谷川の水を引き込んだ庭内溪流にかかる銅橋があります。これは「住友グループを生み出した母なる銅山」とも称せられる足尾銅山の産銅を以て明治12年に鑄造

制作されたものです。昭和12年に有芳園に移されました。

庭園を巡る小道は池を見渡しながら赤松の森から小川治いに涼やかな水音を聴きながら大滝へと進み、坂を下ると広い芝生を前庭に書院造の邸宅が見えてきます。順路の最後にはエンタシス風の柱を擁する歴史展示館があり、400年にわたる住友家の壮大な歴史を貴重な実物資料や模型、映像などによって目の当たりにすることができました。



木々に囲まれた「住友有芳園」にて

「元離宮二条城」 歴史を見守り変遷した偉大な木造建築 400余年を経てなお絢爛たる世界遺産

1603年、江戸幕府の初代将軍・徳川家康によって京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所として築城された二条城。400年以上を経てもなお威風を誇る伝統的木造建

築の様式美と技術、ダイナミックに展開される障壁画芸術は多くの人々を惹きつけています。1994年にはユネスコ世界遺産にも登録された日本の貴重な歴史遺産です。ようやくコロナ感染防止策が緩和されて、城内は観光客で賑わっていましたが、見て回るだけでは見過ごされがちな時代背景による建築様式や意匠の変遷などの詳細を、二条城オフィ

シャルガイドの方の案内でつぶさに見聞することができました。

二条城は1867年に15代将軍・徳川慶喜が二の丸御殿大広間で大政奉還の意思を表明したことで有名ですが、その後、新政府に接收され明治時代には皇室の別邸・二条離宮となっていたことから、正式名称は「元離宮二条城」といいます。現在は京都市が所有し管理を行っています。

400年の間には自然災害や火災に遭い何度も改修されてきました。2011年から約20年の歳月をかけて行われた大改修では、阪神淡路大震災によって生じた構造の歪みを修理して耐震補強が施され、現代の宮大工の技術の粋を集めて国宝6棟、重要文化財22棟のすべての歴史的建造物を見事によみがえらせました。また二の丸御殿には重要文化財1016面を含む約3600面の狩野派の手になる障壁画が残されており、それぞれが数ある部屋の格式や役割を表しているといわれます。それらの原画は「二条城障壁画 展示収蔵館」で間近に鑑賞することができます。

研修ではオフィシャルガイドの方の詳細な説明を聞きながら、全6棟からなる二の丸御殿をゆっくり時間をかけて歩くことで、時代を経た木のぬくもりと堅牢さ、伝統的木造建築の技術の巧みさを実感することができました。



切妻造り、檜皮葺の四脚門「唐門」（重要文化財）の前で



和洋折衷庭園「清流園」についてオフィシャルガイドの説明を受ける



和洋折衷庭園「清流園」



徳川慶喜による大政奉還の表明がされた大広間



二の丸御殿をバックに唐門を見上げる

2時間耐火構造大臣認定第一号物件 大子町新庁舎視察会

技術開発委員会

木住協が取得した2時間耐火構造大臣認定を使用した第一号物件である茨城県大子町新庁舎が完成し、木住協技術開発委員会は、2022年8月8日(月)に完成現場視察会を行った。連日猛暑が続いていたが、現地は最高気温32℃と比較的過ごしやす中、11名が参加した。

設計者より建物内をくまなく案内いただき、木造とした経緯や設計主旨、構造計画などについて詳しい説明を受け、参加者からの質問に丁寧に対応いただいた。

大子町新庁舎は、行政棟、議会ホール棟、倉庫棟で構成された地上2階建て、延べ面積5,073.11㎡の庁舎で、純木造で建てられている。

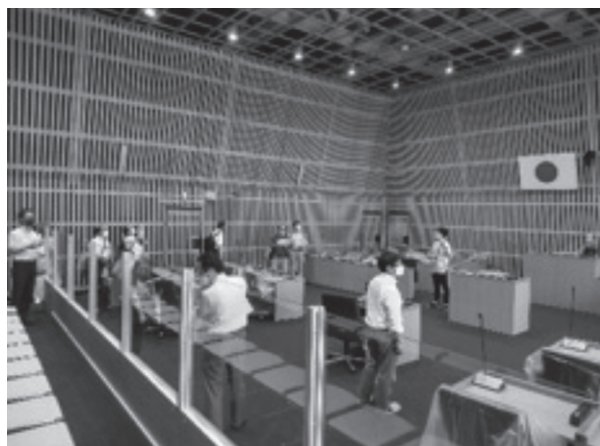
行政棟と議会ホール棟を接続する渡り廊下を2時間耐火構造とした耐火コアで分棟し、各建屋の面積を3,000㎡以下に抑え、柱・はりを現しとした燃え代設計による木造準耐火構造としている。建物の最高高さを9m以下に抑え、基本モジュールを2間とし、一般流通材を多用できるよう計画されている。柱は240mm角のスギ集成材、はりは240×360mmのスギB P材(接着重ね材)、方杖は120×210mmのスギ製材等が使用され、総材積量900㎡の茨城県産材が用いられている。

耐力要素を周囲に分散させ、中央部は方杖付きの柱を並べることで壁のない開放的な空間で、2階までの大きな吹き抜けとなっている。

地球温暖化防止や森林資源・林業の健全化の必要性が注目され、2021年には2050年カーボンニュートラル実現



と脱炭素社会を目指した「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」の改正や建築基準法における耐火関連事項が改正されるなど、木造による中大規模建築物の建築が推進されている。



新規会員紹介

2022年7月から2022年10月までに入会されました企業を紹介します。みなさん、よろしくお願いします。

(株)アキュラホーム神奈川

1種A正会員

注文住宅会社の株式会社アキュラホームより神奈川県内を拠点とする部署が今回分社いたしました。

代表取締役 加藤 博昭

〒222-0033 神奈川県横浜市港北区新横浜2-13-6
第一K・Sビル7階

TEL : 045-478-2322 FAX : 045-478-2330

<https://www.aqura-yokohama.jp/>

(株)あすなろ建設

1種C正会員

アトリエ建築家と提携し、夏涼しく、冬温かい高性能な木造住宅をご提供いたしております。

代表取締役 仲松 末一

〒904-0012 沖縄県沖縄市安慶田4-2-12

TEL : 098-930-3333 FAX : 098-930-3344

<https://www.asunaro-rhouse.co.jp>

ADACHI 住建

賛助会員

親子二代にわたって工務店を営んでいます。地元根付いた地域密着型の工務店ならではの、・地元の土地を熟知・親身な対応・担当が変わらない・価格と自由度・柔軟な対応といった特色があり、お客様に安心して頂けるよう心掛けています。設計から施工まで、大工だからこそできる心のこもった、家族のぬくもりと笑顔を感じられる、心がほっとする住まいづくりをモットーに、「行列のできる工務店」を目指しています。福知山で注文住宅をご検討されている方は、是非ご相談ください。

代表 足立 崇

〒620-0962 京都府福知山市字榎原1279

TEL : 0773-21-5875 FAX : 0773-21-5885

<https://www.house-doctor-adachi.com/>

ABI一級建築士事務所

3種正会員

令和3年10月より開業いたしました。まずは身近な方の建築に関する悩みを解決していきたいと思います。

代表 阿比留 康孝

〒819-1128 福岡県糸島市篠原東2-4-15

TEL : 092-339-9816 FAX : 092-339-9816

Sデザインファーム(株)

3種正会員

・建築・インテリアの計画、設計、管理 ・家具・プロダクトの企画、デザイン及び製作 ・シェアオフィスの企画、設計、運営 ・前各号に付帯する一切

代表取締役 鹿内 健

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-26-18

園ビルディング1階

TEL : 03-6280-7397

<http://s-designfarm.co.jp>

(株)EFFECT

1種B正会員

弊社は解体・外構・造成工事を主な業務としていますが、建築工事を行う総合建設業を目指しております。

代表取締役 内山 学

〒251-0052 神奈川県藤沢市藤沢89-1

メイキビル4階

TEL : 0466-52-7537 FAX : 0466-52-7538

<http://effec-t.co.jp/>

(株)CONCEPT建築設計

1種C正会員

高気密高断熱住宅の設計と分離発注での施工です。

代表取締役 橋本 裕之

〒921-8065 石川県金沢市上荒屋4-155-2

TEL : 076-240-8491 FAX : 076-240-8492

<https://hashi-net.com>

(株)タナカホーム

1種B正会員

創業60年超の地場工務店。高性能注文住宅を主とし、2022年にパッシブハウス認定物件を手掛ける。

代表取締役 田中 誉宗

〒885-0042 宮崎県都城市上長飯町67-1

TEL : 0986-23-0308 FAX : 0986-23-7715

<https://tanakahome.jp/>

第一建設(株)

1種B正会員

美しいデザインと高性能を兼ね備え、年を重ねても飽きないしつらえて、未来を見据えた「ロングライフデザイン」の家

代表取締役 後藤 昇

〒417-8538 静岡県富士市永田67-14

TEL : 0545-52-9064 FAX : 0545-52-5350

<https://www.daiichikensetsu.co.jp>

(合)トド・エ・ブエノ

賛助会員

トドエブエノ (Tode et bueno) とは「万事良好」という意味です。言葉の実現を目指して活動しております。

代表社員 深沢 政人

〒272-0834 千葉県市川市国分7-7-19

TEL : 090-4715-1532

(有)西脇建工

1種C正会員

注文住宅及び店舗設計施工・リフォーム

代表取締役 西脇 博幸

〒483-8015 愛知県江南市和田町中島64-1

TEL : 0587-59-7952 FAX : 0587-54-1666

<https://westside-house.com/>

(一社)日本CLT協会

賛助会員

当協会はCLT及びCLTを用いた建築物を通じて、木造建築物を中心とした建築の可能性を広げ豊かな実りの多い社会を実現します。

代表理事 中島 浩一郎

〒103-0004 東京都中央区東日本橋2-15-5

VORT東日本橋2階

TEL : 03-5825-4774 FAX : 03-5825-4775

<https://clta.jp>

(有)フロンティアーズ

1種C正会員

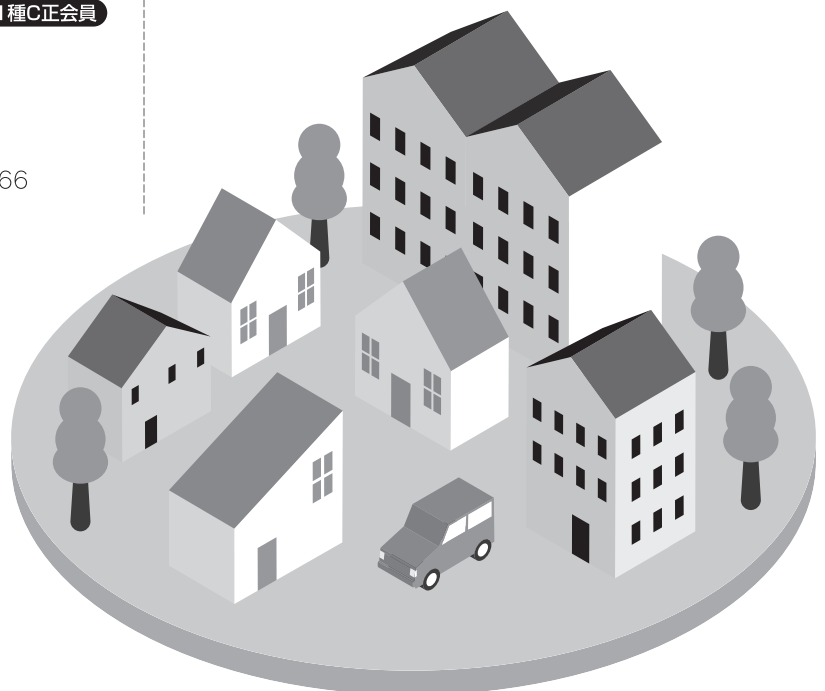
弊社は創業29年目の外装工事会社です。2017年からZEH・ZEBを普及する活動をきっかけに、新規事業として住宅建築を始めました。沖縄県内では数少ないRC造、木造のZEHをメインに販売しています。

代表取締役 伊藝 直

〒904-2142 沖縄県沖縄市登川828

TEL : 098-934-6701 FAX : 098-934-6702

<https://www.frontiers-house.jp>



木の匠

Historia
ヒストリア



〈東京都台東区〉

韻松亭 (いんしょうてい)

明治時代の料亭建築の様式美をそのまま残す希少な建物が、上野公園内にある「韻松亭」である。この建物の歴史は、上野公園の歴史でもある。明治政府は、欧米列強にならって都市公園法を制定して、明治8(1875)年に上野公園を開園した。この時、日本で初めての西洋式公園内の飲食施設として、西洋料理店「精養軒」とともに、日本料理を提供する料亭として開業したのがこの「韻松亭」であった。

「花の雲 鐘は上野か 浅草か」と松尾芭蕉の句にも詠まれている上野・寛永寺の鐘楼がほど近くにあり、「鐘の音が松に韻く」風情から、上野博物館初代館長 町田久成によって「韻松亭」と名付けられた。

上野の杜の中に佇む風雅な数寄屋造り二階建てで、関東大震災や太平洋戦争での空襲からも免れたため、創業当時の建物の外観はそのままの状態で保存されている。内装は平成15(2003)年に現代風に一部改装されたが、無垢板と網代天井、公差する太い梁、板張りの磨き込まれた階段や廊下、にじり口から出入りする詫びた茶室風の個室など、建物は上品な落ち着きと風雅な雰囲気にあふれている。

韻松亭(いんしょうてい)

建 築	明治8(1875)年
所 在 地	〒110-0007 東京都台東区上野公園4-59
電 話	03-3821-8126
店舗営業時間	午前11時～午後4時 午後5時～午後11時
店舗休業日	年末年始
所有管理	東京都

<http://www.mokujukyo.or.jp>



一般社団法人
日本木造住宅産業協会



木 芽 2022年12月5日発行

Vol.182

発行人 越海 興一 編集 業務・広報部
〒106-0032 東京都港区六本木1-7-27 全特六本木ビル WEST棟2階
電 話 03(5114)3010(代) FAX 03(5114)3020